

## 第二次大戦後のトーマス・マン受容への一視点

— Marcel Reich-Ranicki (hg.): 《Was halten Sie von Thomas Mann?》の紹介をかねて—

三 浦 淳

Marcel Reich-Ranicki の編集になる『あなたはトーマス・マンをどう思いますか』という本が、1986年7月に S. Fischer 書店からポケットブックのオリジナル版として出版された<sup>1)</sup>。以下でその紹介を試みると共に、それをだしに使うトーマス・マン受容の(そしてひいては日本における外国文学の受容や研究の)あり方について少しばかり考えてみることにしたい。

### I

《Was halten Sie von Thomas Mann?》は、作家トーマス・マンについての有識者の意見をアンケートの形で集めたものである。

Reich-Ranicki はこの本の序文を、芸術家の記念の年によく行われるアンケートは必ずしも期待されるような結果を生まない、という一般論で始めている。シュテファン・ゲオルゲの60歳記念でも、バートホーフェンの没後100年記念でも、有識者向けのアンケートでは否定的な評価の回答が多かったというのである。

彼がこう言うのも理由のないことではない。この本の基礎になっているのは、約10年前の1975年、つまりマンの生誕100年没後20年に、「Frankfurter Allgemeine」紙上で彼自身が行ったマンへの評価のアンケートだからである。この種の企画では、実際に掲載される人数の数倍の依頼をしなくてはならない。断われたり、書くこと約束しても守られなかったりするからだ。R. -Ranicki はそうした交渉の経験をいくつか紹介している。M. Walser は言う。「すでにほかに書く約束があるから。それにそれを読めば自分に頼まなくてよかったと思うだろう」P. Handke も断わってくる。「マンを読んでいたのは10年も前だ」A. Sehgers も拒否する。「自分はマンに対して矛盾した二つの気持ちを持っている。むしろ沈黙したい」H. Arendt

も断わる。「マンがほとんど何の意味も持たない極めて僅かの人間の一人が私ではないか」

そして寄せられた回答も好意的とはいえないものが少なからずあった。

アンケートの文面は単に次のようなものである。「あなたにとってトーマス・マンはどういう意味を持っているのでしょうか。あなたは彼に何を負っていますか」

R. -Ranicki はこうして18人の回答を得、1975年5月31日の「Frankfurter Allgemeine」紙土曜版に自身のはしがきと共に掲載した。

この『あなたはトーマス・マンをどう思いますか』は、約10年前のこの回答を第一部としてそのまま再現し、第二部では同じ回答者が10年を経て再びマンについての意見を開陳する、という体裁をとっている。しかし第二部に再登場するのは8人のみである。5人は物故者となり、5人は再回答を拒んだからである。

回答者は、作家、批評家、研究者などである。割に名前を知られた人としては哲学者の Hans-Georg Gadamer、作家の Siegfried Lenz や Hans Erich Nossack、歴史家でトーマス・マンの次男である Golo Mann などがいる。イギリスの作家 Graham Greene の名も見られる。

10年を経た後の評価の揺れは当然ある。時代の雰囲気や個人の変遷もあり、またこの間、死後20年間開けるべからずという遺言がなされていたマンの日記が次々と公開され、それがマン評価に影響を及ぼしたということもある。R. -Ranicki の言い方に従えば、日記公開によって従来のマン像は光輝と熱情を失う代わりに真実味と裸の人間性を獲得した、ということになる。

次に、西ドイツでのマンをめぐる状況を R. -Ranicki は概観している。生誕100年時の激しい反トーマス・マン的雰囲気は、かつてのゲーテやシラーの場合同

様、その人の名声を固めることはあってもその逆はないだろう、と彼は言う。彼の本の売行きは落ちていないし、大学でもマンを扱う講義やゼミは盛況である。彼に匹敵する人気を持つのはカフカ位で、ムージル、デーブリン、ハインリヒ・マン、ブレヒトなどは後退している。

そして序文の最後で R. -Ranicki は警告を発している。この本でトーマス・マン解釈の処方箋が得られるとかマンの読み方が分かるなどと思う人は失望するであろう。逆に、1975年と1985年のアンケートの結果は、彼の作品がどれほど違った風に読まれ得るかを示しているのだ。それは注釈や解釈同様、作品そのものにいたる道なのであり、副次的な役割を果たすに過ぎないのだ、と。

序文の後に来るのは、1975年のアンケートが新聞に掲載された時 R. -Ranicki がつけたはしがきである。

そこで彼は文学史的な事実の確認から始めている。ゲーテとツラーとハイネがドイツの劇と叙情詩を世界的な反響を呼ぶレヴェルにまで高めたが、ドイツは小説についてはゲーテの『若きヴェルターの悩み』を例外としてヨーロッパ規模の評価を得ることがなかった。マンが初めて『ブッデンブローック家の人々』で国際的な評価を獲得し、以後の作品でドイツ小説の声価を半世紀に渡って守り高めたのだ。彼の本は40カ国で翻訳されている。

その後で R. -Ranicki は次のように言う。アドルフ・ヒトラーとトーマス・マンがドイツの両面を代表しているのであり、ドイツがその一方を忘れるなら精神的な自殺行為に等しいであろう。しかし重要な作家であればあるほど、手放して賞賛している訳には行かなくなる。今度のアンケートの結果は、幸いまだマンが博物館入りしていないことを示してくれた。生前もそうであったが、死後20年たつていまだに激しい反応を引きおこすということは、作家たる者の不名誉にはなるまい。

こうしてよいよアンケートへの答が来る。R. -Ranicki の本では1975年の18人と1985年の8人分の回答は別々に収められているが、ここでは個々人の評価の変遷をはっきりさせるために、一人一人について二回分をまとめて紹介しよう。特に断わりがない場合

は、1975年の一回目のアンケートにのみ答えているものである。原著では回答者の氏名のアルファベット順に収められているが、ここでは内容的に類似しているものをまとめて見ていくことにする。

まず、自分はマンを偉大だとは思いが好きではない (bewundern, aber nicht lieben) といった答が幾つか見られる。

ハンガリーの作家 Tibor Déry (1894-1977) はマンへの違和感の原因として、彼の全てを染め上げていく市民性、自国を保持しようとするドイツ市民の態度をあげている。彼が生前に忘却の河の水を飲めたら良かったろうに、と言うのである。

オーストリア出身の作家 Manés Sperber (1905-1984) は、ジッドヤドス・パソスやプルーストの作品と並んで『魔の山』によって20世紀小説の新しい潮流を教えられたと言う。19世紀と違って小説は現実を直接的に表現するのではない、マンにあっては言葉が現実となり現実が言葉となっているのだ。自分はマンが特に好きという訳ではないし彼の政治的発言は気に入らないが、彼がドイツ文学で最も重要な小説家であり、また今世紀で最も重要な作家の一人であることは確かだ。私は彼を半世紀の間愛しはしないが尊敬してきた。

オーストリアの作家 Friedrich Torberg (1908-1979) は、マンを小説家の巨匠として尊敬はしているが愛しはしていない、と言う。但し自分のマンへの留保は、ブレヒトに対する場合同様政治的な理由によるものだ。コミュニストへの許容的態度はいただけないし、今日の知的退廃の根がそこにあるように思う。しかしブレヒトもそうだが、だからといって彼の文学の素晴らしさは否定できないのだ。彼はドイツ文学が生んだ最大のフモリストだと思う。大作家 (Dichturfürst) の権威と風格を持った最後の人であった。

西ドイツの作家 Wolfgang Koeppen (1906-) は、自分はマンを余り評価してこなかったのではないかと恐れる、と書き始め、彼の作品に感心はするが感激はしない (bewundern, aber nicht begeistert sein) と言う。彼は深淵にすばやく目を走らせるだけで、人間の不幸を知りつつもそこから目をそらせる。『魔の山』は社会小説で、登場人物は良き社会に属する人たちだ。ようやく最後の数頁で社会の解体が述べられる。『ヴェニスに死す』のアッセンバハは美少年を愛するがあくまでプラトニックな領域にとどま

り、少年を部屋に誘い込むような真似はしない。全ては朝まだきの夢の如きもので、そこから醒めたマンは『主人と犬』のように散歩するのだ。社会の安定した価値観の中で。

次に、共感と批判をまじえながら、自らの読書体験をもとにマンについて述べている人が何人かいる。

イギリスの作家 Graham Greene (1904-) は簡単に読書体験を綴っている。若い時『ブッデンブローク家の人々』を深い満足感と共に読んだこと、『魔の山』には仰ぎ見るような印象を受けた、つまりこれで生きようとは思わなかったこと、短篇が好きで、特に『ヴェルズングの血』は気に入っていること、愛読書として変わらないのは『ヴァイマルのロッテ』で、三回読んだこと。そして、以前は小さな子供が校長先生の遠い姿に対して抱くような不安げな尊敬心を感じていたが、マンの書簡を読んでからは彼を愛せるようになった、と言う。

東ドイツの文学研究者 Wolfgang Harich (1923-) は、15歳の時からずっとマンを愛読しているが、ブレヒトも好きで、この仲の悪かった二人の作家を同時に愛してられるのは Hanns Eisler [1898-1962: 作曲家] のお陰だと言う。Eisler は戦後自分に次のように指摘した。一見君 (Harich) のマンへの没頭は純粋に美的なものに思えるかも知れないが、実は必然的に反ファシズム的な政治意識であったのだ、と。Harich は反論する。『フリードリヒと大同盟』や『非政治的人間の考察』なら私を反動的に教育したろう。マンののちのヴァイマル共和国肯定は市民的・保守的な枠内でのことだ。1932年のゲーテ祭での社会主義への共感告白は、当時自分は知らなかった」Eisler 「君は、市民的野蛮の最大のもの、つまりファシズムを市民文化と市民ヒューマニズムの最後の美しい花が差しだしてくれる基準でもって判断することを学んだのだ」Harich 「しかし戦争反対の気持ちを起こさせ、支配者の実態を暴いて見せてくれたのは、他の作家や詩人や画家だ」Eisler 「確かに。それでもマンは君にとって直接的な進歩的姿勢を生み出すための酵素のようなものだったのだ」

それからこの二人の話はブレヒトとマンの関係に移る。マンへのブレヒトの反感に当惑していた Harich に Eisler は言う。「亡命中の下らぬ議論のことは忘れよう。ブレヒトが古典的偉大さを備えたプロレタリア文学を創始したことは確かだ。しかし彼にそれが可

能だったのは、マンの後期市民社会的洗練への反発があつてこそだった。創作するブレヒトには反感も必要だったろうが、読者である我々には必要ない」そして Eisler は自分のことに触れてこう語ったという。「ブレヒトがマンへの憎悪を必要としたように、作曲家の私はヴァーグナーやR・シュトラウスへの憎悪を必悪としている。でもトリストランやバラの騎士なしには共産主義の最高段階を想像できないよ。魔の山なしのブレヒトが考えられないようにね」

ハンガリー出身の作家 Arthur Koestler (1905-1983) は簡単に、自分は二つのものをマンに負っていると述べている。一つは、小説は科学的な詳論を含むことができるということ、もう一つは創造した人物への情愛のこもったイロニーである。

オーストリアの作家 Hans Weigel (1908-) は少年期から最近に至るまでの考え方の変化を率直に語っている。若い頃はマンの模倣をして小説を書いたこと、第一次大戦期のマンの政治的誤りについては当時判断するには若すぎたこと、ヴァイマル共和国への態度は模範的と映ったこと。彼のヴァーグナー論へのH・プフィッツナーやR・シュトラウスの抗議には激昂したが、マンが新体制を否定する人たちに加わらなかったことでショックを受けた。読者とのつながりを大切にしたいとマンは言うが、結局デモクラシーではなく、愛着のあるもので態度を決めていたのだ。しかし彼が亡命してからのラジオでの演説には感銘を受けた。だが大戦後彼がドイツへの帰還を拒んだ書簡を読んでまた考え方が変わった。ナチスに同調せずに危険と困難さに耐えて国内にとどまった人を何人も知っていたからだ。私は彼らと一緒に反トーマス・マン的感情を抱いた。さらに、外国のジャーナリスト宛の書簡で彼が容共的発言をしているのを知り反感がつのった。ジッドのような偉大な反ファシストでもスターリンの反人間国家 (Antiwelt) とは一線を画しているからだ。マンには50年代のデモクラシーの現実より共産主義の方が良かったのだろうか。私はついに少年期の師表にきっぱりと別れを告げ、マンを一切読まなくなった。それから随分と時が過ぎ、ある目的のために『魔の山』から引用せざるを得なくなった。読み始めるとやめられなくなった。昔の愛着が甦ってきた。エッセイや講演の本を沢山買った。以来それを好んで手にとるようになっていく。彼のドイツ精神のいかがわしいところは歴史に属するものとなった。

私にとって彼のドイツ語は最初に読んだ時のように生気にあふれている。

Weigel は1985年のアンケートにも簡単な回答を寄せて最近の体験を語っている。ある日テレビのスイッチを入れると、トーマス・マンが画面にあらわれた。しかしそれは勘違いで、実際には彼の次男のゴロー・マンだった。自分はこの歴史家に以前から尊敬の念を抱いている。放送の間中、彼とその父に大きな然り (ein großes ja) を言わずにはいられなかった。

イギリスの作家 Angus Wilson (1913-) は、マンが自分に20世紀小説の語りの変遷を教えてくれたと言う。『ブッデンブロック家の人々』で同時代のどのイギリス作家をも凌ぐ偉大なリアリストを知った。『魔の山』では、リアリズムに加えて隠喩という領域が開拓されたことを知った。『ファウストゥス博士』ではイロニーの多義性に、『クルル』では、小説は小説それ自体を、語りを、フィクションの幻影を問わねばならないということに気づいた。しかしその一方でマンは昔の作家から断絶した存在ではなく、それ故にこそ私は彼を尊敬している。彼は象徴的なものと物語風のもの、隠喩的なものを象徴的なものと、イロニーと隠喩的なものを結びつける。人間性や共感といったものと切り離されることがない。彼のまわりくどさや学者臭が気になることもあるが、小さな瑕瑾にすぎない。

同じように自己の読書体験を語りつつも、文学や時代の動向の分析に傾いている人たちもいる。

西ドイツの哲学者 Hans-Georg Gadamer (1900-) は、マンが外国の文学好きの間で愛読されているのは、ドイツでロシアやスカンディナヴィアやフランスやイギリスの文学作品が愛好されているのと奇妙なコントラストをなしている、と言う。我々は確かに若い頃マンの作品を好んで読むが、それは外国文学への入門のようなものなのだ。ドイツ人は他の国の人間に比べて物語ることが不得手であり、マンは中でも物語りのナイーブな喜びを失った極端な例であろう。その語りの特徴は科学的精確さにあり、絶えず意識的でユーモアはあるが共感はない。語りの雄大な自己忘却が欠けている。彼の芸術家としての高さは、純粋な語りにも最も近づいたヨーゼフ小説に示されていると思う。それは神話の人間化にさからって、真の叙事的距離 (epische Distanz) を達成している。後期のものは『ファウストゥス博士』を含め余り魅力がない。物語

る姿勢に妙に神経質なところがある。プルースト、ジョイス等同時代の作家の影響だろうか。我々の世紀に真の物語が成立したことはマルケスやホワイトが示している。しかしマンが人工的な (preziös) 文体の巨匠であることは、公正のために言っておかなくてはならない。

Gadamer は1985年のアンケートにも答えている。根本的に前言を修正する必要は感じないとした上で、歳をとると若い頃の読書体験が甦ってくると言う。『ブッデンブロック家の人々』をあつ若さで書き得たことには何度でも感嘆しないではいられない。『非政治的人間の考察』の「非政治的」という言葉は魅力的だった。第一次大戦後様々な政治団体がうごめいていたが、若い私が保守派を説得的と思ったのはマンのこの本のせいだった。後で考えてみると Edmund Burke と共通点があった。のちの野蛮によって文明と文化の区分は過去のものになった。しかしこの本に私が惹きつけられたのは、伝統や権威というものは何かに判断を下す際の物差しにはいけないが、小さからぬ生のきずなを作っているものだという、新聞には書かれていないことを考えるようになったからだろうかと思う。

西ドイツの作家・文芸学者 Walter Jens (1923-) は、マンは最後の者であつて創始者ではないと言う。ブレヒトやカフカやホルヴァートなら、彼らがいなかった場合現代ドイツ文学もかなり様変わりしていようが、マンの場合余り影響はあるまい。彼は論争家ではなく調停する者だ。あらゆる矛盾を総合する者だ。それでは彼は古典作家であり我々に無縁であるのだろうか。彼は私にとっては言葉に堪能な百科事典作家 (sprachgewaltiger Enzyklopädist) だ。抽象的なもの、専門的なものがいかに具体性を獲得し得るかを示してくれた。言葉の喪失におびやかされている世界に理解を与えるという、二千年来レトリックに課せられてきた使命を果たしたのだ。仲介者である彼がいなかったら、市民文化を現代に伝えてくれた彼がいなかったら、現代と過去の亀裂は大きくなっていただろう。彼がいなかったら我々の存在は余りに断片的になり過去を想起することがどれほど困難になっていたことだろう。

Jens は1985年のアンケートにも答えている。公開された日記の内容に触れて、同時代や後の世代の作家たちへの否定的態度、ホモセクシュアルの傾向、『フ

『ファウストゥス博士』こそが本来的なものでその後の作品は付け足しだという自己評価、『クルル』以降の新しいプランにとりかかる力が残っていないのではという懐疑心等々を指摘し、こうしたマンの姿は喝采よりも共感に値するのではないかと、言う。

ポーランド出身で現在は亡命してイギリスに住んでいる哲学者 Leszek Kołakowski (1927-) は、マンは病理学の作家 (Dichter der Krankheit) だと言う。病気とは我々の身の上で起こることではない、我々は肉体である限り癒しがたく病気の体だ。このことを端的に表現することがマンの使命だった。哀れなルカーチはマンとレーニンとを同時に愛そうとした。そんなことは不可能だ。あらゆる大作家のようにマンも進歩というものを信じていなかったが、人間が善きものへの能力を持つこと、希望をもつ権利があることは信じていた。しかし病と悪とは救いへの道ではない。仮にそうだとすると、病が創造的だから等という理由からではない。『ファウストゥス博士』のレーヴァキューンの像は、芸術が罪の正当化にはならないことをあらわした。この作曲家が救われるとしてもそれは天才だからではなく病人だからだ。どんな偉大な創造をしてもそれで罪を免れることはあり得ない。世界もそうだ。生成の無垢などあり得ない。その意味でマンはニーチェ主義者ではなく、キリスト者である。

トーマス・マンの次男で歴史家の Golo Mann (1909-) は、まず主要作品への感想を綴っている。『ブッデンブローック家の人々』には頂点がなくいつも同じ高さでゆったりと流れ続ける。『魔の山』は16歳で読み、偉大な教養体験とでも言うべきものをした。ベレンス顧問官が一番のお気に入りだった。しかし雪の章のモラル臭はやりきれない。それと二巻本では7年を描くには十分でない。『ヨーゼフとその兄弟たち』は最も偉大で最も豊かで最も素晴らしい。世界文学の頂点と言いたい箇所が幾つもある。『ファウストゥス博士』の悪魔は、恐ろしさと思想的な強靭さではイワン・カラマゾフのそれを凌いでいるのではない。ただこの作品には本来のプランと関係のないものが入り込んでいるので、それを削ればもっと効果が高まったろう。『選ばれし人』は小ぶりの長篇の中では一番気に入っている。はずせない作品だ。G. Mann はその後で、1975年現在の風潮を踏まえているらしい物言いをしている。現在、芸術のいと高き裁き手たちが、不承不承の賞賛に尽きることはないあてこずりを

まじえて語っている。ウルトラ左翼のある作家は、巧みに引用を並べることで大学の講義室で笑いをかちえている。結構なことだ。パロディーを多用するものは自分もパロディーにされても致し方ないところだから。強いられた「政治家」であったトーマス・マンは、無論最初から最後まで無傷という訳にはいかなかったし、自分でもそのことを心得ていた。それでも、厳格なお歴々のしていることは一千年かけてダイヤモンドの山をつついている鳥のように見える。掘り崩すまでにはまだ時間がかかるだろう。

1985年のアンケートで G. Mann は次のように言う。10年たったが本質的な変化はあるまい。新しいことと言えば日記が公開されたことだ。神経質な側面などは私はもともと知っていたし、彼の作品を読んでも分かることだ。ただ、二つの点で私は驚き、赤面した。一つは彼のエネルギー、ヴァイタリティーだ。講演旅行などにそれが示されている。もう一つは家族への愛着だ。無論同性愛的傾向も知った。だがそれを抑制したのは家族への責任だったのだ。日記は幾つもの穴を埋めるだろうが根本的なマン像の変化はないだろう。一番いいのは彼の小説を時折ひもとくことだ。マンの日常の生活の様態が日記にも増して読みとれる。ゲルマニスト諸氏は冷たく利己的なイローニカーだと言うが、ヨーゼフ小説には人間性、人間への親しみがある。この作品を執筆している時彼は、「私は歴史小説を書いてはならない」と言った。確かに歴史小説にはなっていない。だがなぜなのか、私には分からない。専門家諸氏の解明を望みたい。

スイスのゲルマニスト Adolf Muschg (1934-) は次のように言う。マンは彼が代表したヨーロッパ文化に対し国家に対する憲法学者のような立場にあった。原則を立てたり目標設定をしたりするが、そこには自分の振舞いは関与しない。自分を解消した慇懃さの印象がかくして生じイロニーと呼ばれるのだ。だがそれは余りにすぎがなく百科事典的で権力 (Großmacht) のようにすみずみまで入り込んでくるので、人に愛されない、たとえ自分も苦しんでいると称しても。私のような愛読者はものを書く時マンの真似をしないようにしなくてはならない。うまくいきこないからだ。マンは彼の時代の代表的な作家であり、今世紀のドイツ文学で唯一争う余地のない古典作家であるのだろうか。然り。しかしこう言ってみても言わば額面価格で、実勢価格ではない。私は今日マンがなくて

も書いていけるし生きていける。カフカ、R・ムージル、ブレヒト、ヤーン、ルートヴィヒ・ホールナシでは苦痛だろう。彼らの作品は、我々内部の凍れる海を割る斧のようだ。新しい国への探検のようで、彼らが限界に突き当たったところで読者は何かを体験できるのだ。本当に限られた力しか持たないこういった人たちに関わっていると、一見無限の力を持つかに見えるマンに対し不当で不公正な気分になってしまう。

Muschg は1985年のアンケート回答では、マンが葬られている Kirchberg の墓地の描写から始めている。マンは芸術では描写にいささかの曖昧さをも許さなかった。しかし実生活はどうだったか。彼はその危機や情熱を隠すすべをこころえていた。彼の墓を見ているとこの問題が浮かび上がってくる。彼は生前できあがったばかりの作品の朗読のために家族を回りに集めた。家族は、彼の芸術と危機の、芸術への懐疑とその克服のリハーサルの場となった。家族はそこで全身全霊を傾けて聴かないことは許されなかった。家族は最初の読者でありまた一般読者への前衛だった。彼は自分の平素の快適さを保持するため実に多くを必要とした。日記公刊以来彼が自分を守る必要を感じた理由が明らかになっている。同性愛からヒポコンデリーまで彼は色々苦しんだであろうが、彼が恐れたのはその一義性であって、それが平板な解釈にさらされることを拒み仮装のもとにおかずにはいなかった。日記からはまだ様々なことが分かるが、結局日記というものもマンの作品であって、『ヴァイマルのロッセ』のゲーテのモノログの域を出ない。彼の作品は大学でも相変わらず尊重されているが、彼の作品から再び新しい何かが発見されるのはもう少し時間がたってからだろう。余りに徹底的に解釈し尽くされてしまっているからだ。彼の小説に比べれば『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』や『アントン・ライザー』は新しいとさえ言える。最近『ドイノの悲歌』を読み返して新鮮なものを感じたが、マンにはこれが欠けているのだ。彼には全てがあるが動いているのだろうか。彼は自分の形式がとらえることのできる範囲を越えて執筆活動 (Spiel) を続けようとはしなかった。彼の芸は堅牢なできあがった芸であり、満たされた要求であり、ほこりをかぶっている。マンの墓の近くには偽物の魔術師クラークスが埋葬されている。マンは本物の魔術師だ。しかし彼が私に関係を持つだろうか。持つと信じたいが余り実感できない。しかし彼が私に無関係だ

と言えば嘘になる。多分彼は、私に満足を与えるには余りに多くのことをし過ぎたのだ。

次に、1975年の時点でかなり批判、或いは嫌悪を前面に出している人たちがいる。10年後再論の機会があった場合は少なからず調子が変わっている点も共通している。

東ドイツの作家・詩人で1979年以降西ドイツに住んでいる Günter Kunert (1929-) は、ある作家があまりに尊敬を集め認められていることは彼をして古典作家にするにとどまらない、同時に目覚めた精神によって彼を疑わしいものにする、と始めている。このメルヒェンの語り手と共に彼の素材となった時代は終わった。彼の生んだ登場人物ははや現実的ではなく、対してカフカの登場人物の中に先取りされていた真実は実現している。現代におけるマンのアクチュアリティとは失われたものへのノスタルジーだろう。彼の魅力は徹頭徹尾メルヒェン的なものだ、書かれたものも、書き方も。肝心なのはリアリティだが、マンのそれは現実を写すリアリティの外にある。それが彼のとるに足りないところだ。現代では誰でもカフカの書いた虫になる可能性がある。マンは子供の読物として残るだろう。

Kunert は1985年のアンケートには、知人の15歳の娘が『クルル』に夢中になっていることから始めている。やはり新人類の青少年のためのメルヒェンなのか。だがどう答えるべきか、今の自分には分からない。10年前の自分の態度が厳しすぎたのか、洞察力が向上したのか、それとも疲れてしまったのか。確かなことは、今ではマンの作品が異議や反感を生じさせないことだ。彼の生んだ人物やその生き方がリアリティからますます遠ざかっていることは間違いないが。最近のテクノロジーの進歩によって我々は滅亡の淵に立たされた。それがマンの人物をより遠い過去のものに見せているのだが、しかし同時にそれは我々の人間性喪失の指標としてあらわれるのだ。こうした登場人物はメルヒェンのように、失われつつある無垢を示してくれる。朗読会の折り、私をニヒリストとかベシミスト呼ばわりする癖に自分では何の希望も打ち出せないでいる聴衆に「討論」を仕掛けられることがある。そんな時よくマンの『シラー試論』の一節を引用する。野蛮の支配と、文化水準や知的道徳的水準が下がってしまったことへ警告を発し、スポーツと技術へのセンセーショナルな歓声のうちに愚鈍化による没落が来る

という見解を。そして私は最後に引用のもとを明かした上で言う。30年前にこの講演がなされた時あなたたちは拍手を送ったのではないか、あれは何だったのか、そして遅く生まれシラー試論を知らない世代は、現状を長い過程の結果ではなく突然生じた故障で、より精巧な技術を持ってすれば立ち向かうことができると信じている世代はどう反応するのだろうか、と。マンの包括的で多層的な作品も意識改革に寄与できる筈ではなからうか。

西ドイツの作家 Hans Erich Nossack (1901-1977) は次のように言う。マンの本はいつもこらえながら教養のために読んだ。今書庫にはマンの本は一冊もない。若い頃からマンの作品は書いてはいけなスタイルの見本のように思われた。大げさなポーズは独自性のなさを隠すためのものだ。彼のイロニーは距離を保つ真のイロニーではなく感傷を隠す衣装なのだ。だから、彼のスタイルは自分を打ち明けられない臆病さと不正直の総体的結果だ。昔から二種類のドイツ語があることについては未だに研究がなされていない。一つはマンのようにラテン語のシンタックスをもって書かれた精妙で古典主義的 (humanistisch) な書き言葉であり、もう一つはビューヒナーやヴェーデキントのような話し言葉である。それからマンがなぜ成功を取めたのかという点については、本の成功は文学的と言うより社会学的な現象だからだ。マンは基本的に富裕市民階級を賛美している。だから死に絶えつつある富裕市民に支持されたのだ。後に続く世代である我々には従ってマンは関係を持たない。

西ドイツの作家 Peter Rühmkorf (1929- ) は言う。マンの作品には以前も今も馴染めない。彼の言葉のバリアーに阻まれるからで、これは階級的な柵とも言うべきものだ。富裕市民階級的なものしか聞こえてはこず私の関心とは全く一致しない。マンのイロニッシュな滑稽化 (Travestien) に見られるのは、苦勞して得た知識を巧みにひけらかすという最上級生的なたくらみなのだ。パロディーとは現在では批評によって破産させられた慣習でありまた疑わしい伝統のことである。文化遺産をこんなに簡単に翻案できるというのは家庭音楽と同じである。デーブリーンやヤーンやブレヒトがマンを否定したのも個人的な反感からばかりではあるまい。いずれにせよこの作家を評価することは沢山の他の重要な作家を犠牲にすることに他ならない。

Rühmkorf は1985年のアンケートでは次のように言う。ずっとマンの本を遠ざけてきたが、二年前にマン好きの友人が強引に『魔の山』を勧めてくれた。新しい強烈な印象を受けたとは言えないが細やかなイロニーが伝わってきて、魅惑したとは言わないが無縁なまま通り過ぎたという訳でもなかった。しかし途中セテムブリーニが出てくる辺りで我慢できなくなった。彼の登場人物は人形のように感心できない。結局かつてのように放り出した。しかし短篇となるとまた別である。そこには構成的で全体的な感覚がある。これがとりあえず長所だと思うのは、現代文学の退屈さはプランとかパースペクティブへの感覚が萎縮していることと密接につながっているからだ。Rühmkorf はこう言った後マンの短篇を幾つも分析しているが、かなり凝った文体で内容の要約を拒むようなところがあるので省略する。いずれにせよそこに見られるのは、単純な否定や肯定を慎重に避けて通る、どちらかと言えば曖昧な姿勢である。

最後に、二度のアンケートで一貫してマンへの賛美の姿勢をうちだしている唯一の人物が西ドイツの作家 Siegfried Lenz (1926- ) である。マンの墓を訪れた際に奇妙な男から、マンはあなたにとってどういう意味を持っているのかと問われ、それに答えたという想定で書いている。マンは過敏で、人生がしきたり (Konvention) であると悟った。全てを包括するしきりに彼のような芸術家はイロニーをもって抵抗したのだ。彼のイロニーはしきたりとしての世界への留保だったのだ。世界に対して公正であるためには彼はパロディーを用いざるを得なかった。彼は留保を自分の主義としたのだ。Lenz がそう言う男は、それがあなたにとってマンが意味を持つ理由かと問う。Lenz はそれを否定して言う。留保の愛好家マンは、人が留保なく振舞わざるを得ない時があることを見せてくれた。「非政治的人間」も政治的に振舞わざるを得なくなる時がそうだ。犯罪が政治の中に入ってきた時がそうだ。

Lenz は1985年には次のように言う。自分が変わらなずマンの読者であり続けるだろうと意識したのは、10年前のアンケートの時初めてだった訳ではない。学生時代私は彼の散文に驚嘆し暗唱した。私がこんなことをしたのは他にはドストエフスキー位である。彼がニーチェやヴァーグナーやショーペンハウアーや神話によっている部分が多かろうと構わなかった。言葉が

何をもたらし何を可能にするか知りたかったからだ。プルーストを別にすれば、体験可能なものがこんなに洗練されて描かれたことはなかったろう。言うに言われぬものが言葉で語られているのを発見して私は熱狂した。もう一つの楽しみは登場人物との再会である。これには二つの側面があり、一つはその存在、あり方を見て満足すること、もう一つはかの時代の市民社会にとって彼らがどんな存在であったかを知ること。マンの二重の光学。そして素朴な読者としての喜びはいつでも満たされるのだ。

## II

ポケットブックで140頁程の本の紹介としてはいさか長すぎたかも知れない。私が上で煩瑣を厭わず長い要約を試みたのは、ここには最近の、主として西ドイツのマスコミ界におけるトーマス・マンの受けとられ方が端的にあらわれているように思われたからである。芸術家の記念の年のアンケートが必ずしも好意的な調子の回答を引き出さないということについて R.-Ranicki がゲオルゲヤベートホーフエンの例を引いて最初に述べていたことは、実際はかなり抑制した言い方なのであって、別の研究者に言わせると事態はもう少し深刻になる。

《20世紀においては、ドイツの重要な作家の10年もしくは100年単位の記念祭は確かに批判と賞賛のバランスシートを提供してきた。だがその記念の年にかつてトーマス・マンほどに疑われ辱められ嘲られ罵られた者があっただろうか。ためらいの念ですら——こんなに攻撃的な調子をあからさまにしては既にそれだけで、イデオロギー的には正反対でそれ故用いる語彙も異なっているとはいえ、かつて出版界を牛耳っていた民族主義的な奴らと後世は同列に扱われてしまうのではないか、というためらいの念ですら、70年代にはあの連中の声を鈍らせることはできなかったのだ。さあ時は来た、いまだに消えない目の上の瘤トーマス・マンをこの際取り除いてしまおう、連中はそう考えたのである》<sup>9)</sup>

日本の普通の文学愛好者の目には、マン生誕100年の1975年に西ドイツが激しい反トーマス・マンの雰囲気包まれていたということは何とも奇妙に映るだろう。しかし第二次大戦後の西ドイツとトーマス・マン

との関係は決して平坦なものではなかった。マンがヨーロッパ帰還後終焉の地にスイスを選んだのも偶然ではない。ナチス時代ドイツ国内にとどまった者と亡命した者との心理的な懸隔はそう簡単に埋まるものではなかったのである。本稿ではこの点についてはこれ以上立ち入らないが、こうした事情について客観的にとらえることができるのはむしろ第三国に住んでいる人間の方かも知れない。戦後間もない頃のドイツにおけるマン受容について1956年に論文を書いた Bernhard Blume は、彼自身アメリカはカリフォルニアに住んでいたが、次のように述べた。

《まず注目に値するのは、トーマス・マンの決定的な敵がドイツに存在するということである。ドイツ以外ではトーマス・マンはほとんどドイツ古典作家の位置を獲得している。ある作家の影響がこのように不協和音を発しているのは、他のドイツ文学が普通むしろ逆の運命をたどっているから一層目立つのである。第一級のドイツ作家、例えばヘルダーリーン、クライスト、アイヒェンドルフ、シュティフターなどが如何なる理由からか全く、或いはほとんどドイツの国境線を越えないという事態が起こる。それに対してトーマス・マンは外国では高い評価を得ている。リルケ、カフカと並んで彼は20世紀ドイツ文学を代表する作家である。しかしこうした代表的地位は国内では否定されている。(段落)こうした不均衡の原因をまず政治的なところに求めてもあながち誤りではないだろう。(…)ともかく〈トーマス・マンと政治〉のテーマで書かれた最良の書がスイス人の手になるというのは断じて偶然ではない。この論争の興奮や情熱をとらえるのには十分近い位置に、そしてそこに巻き込まれるには遠い位置にあって、著者は平静に論争のあとを追っている。(…)トーマス・マンの文学作品に向い合っている人が、或いは向かい合っていると自分では思っている人が、その実拒否理由を——もしかすると彼自身意識せずに——政治的領域に持っていることがしばしばあるのだ》<sup>9)</sup>

いずれにせよ反トーマス・マンの水脈はドイツにあっては時代による水量の差こそあれ絶えることなく続いてきたと言えるだろう。生誕100年はそれが一気に表面化する良い機会だったということになる。様々な場所で噴出したこうした動きと議論についてはのちに



トーマス・マン・アルヒーフ所長 Hans Wysling がまとめなくてはならなかった程であるが、<sup>4)</sup> 一番目についたのは何と言ってもまず週刊誌「シュピーゲル (Der Spiegel)」の5月26日号に評論家 Hanjo Kesting (1943-) が載せた挑発的な一文であったろう。「トーマス・マン、或いは自らに選ばれし人。ある古典作家に関する10の論争的テーゼ」<sup>5)</sup> と題されたエッセイは、普通の読者はマンが好きだが作家間ではマンが20世紀の代表的作家かどうか疑問視されているとか、彼の代表したドイツ市民階級は消滅しているとか、表題通り10の観点からマンを論難しようとしている。

これに先立つ4月29日、北ドイツ放送 (NDR) はマン生誕100年を機に37人の作家にアンケート調査を行い、その回答を一時間半に渡って放送した。質問の具体的な文面については後で触れるが、要するにマンをどう思うかというもので、回答の多くは否定的なものであった。実はこの放送制作に携わった二人の北ドイツ放送編集局員の一人が上記の Hanjo Kesting だったのである。<sup>6)</sup> 従って放送と雑誌という異なったメディアによって聴取者や読者に媒介された動きの仕掛人は、同一人物だった訳である、ちなみにこの年の5月31日に「Frankfurter Allgemeine」紙で R.-Ranicki の行ったアンケートについては I で紹介した通りだが、北ドイツ放送のアンケートと重複する回答者も何人かいて、Muschg と Rühmkorf はどちらにも同じ文面で回答を寄せている。

翌1976年、Heinz Ludwig Arnold の編集する〈text+kritik〉シリーズでトーマス・マンを扱った巻が発行された。<sup>7)</sup> 特別号 Sonderband と称され通常より頁数の多いこの本は、期せずしてと言うべきか、意図的と言うべきか、前年のマスコミ界の雰囲気余すところなく伝えるものとなった。冒頭に載せられたのは作家 Martin Walser による『魔の山』批判、「最高の食糧としてのイロニー、或いは至高の人々の食糧」であった。次が(またしても!) Hanjo Kesting で「死にいたる病。音楽とイデオロギー」。以下、題名を読んだだけでもなんとなく全体的な雰囲気は分かってしまうのである。「余りに遅く余りに少なく。トーマス・マンと政治」、「『…特別でありたいと思う莫迦げた欲求から』——トーマス・マン『ヴェニスに死す』再読」、「虚構 (fiktiv) の語り手〈私〉の出撃と撤退について。『ファウストゥス博士』——現代小

説?』といった具合である。無論マン批判の論文が全体を占領している訳ではないが、特に前半に批判的な論調のものが目立っていることからしても、編者の意図が奈辺にあるかは歴然としている。そして最後には上記の北ドイツ放送によるアンケートの結果が収録されているから、この書の背後にはやはり Hanjo Kesting の影があると見て良からう。〈text+kritik〉の „Thomas Mann“ は1982年に改訂第2版が出て、第1版の論文が一つ削られ代わりに新たに四論文が追加されているが、基本的な調子に変化はない。例えば「全てはとても奇妙な…。〈ドイツとドイツ人〉に関するトーマス・マンの意見」と題された論文では、最後がこの本の Hanjo Kesting の論文からの引用で締めくくられていて、第1版の精神に則って書かれたものであることが判明するのである。

さて、少し反トーマス・マン論の中身を覗いてみよう。「シュピーゲル」誌に Kesting が載せた10のテーゼとはおよそ次のようなものであった。

- 1) マンは一般の読者には好まれているが、作家間では20世紀の代表的作家かどうか疑う声大きい。
- 2) マンが代表した市民階級は消滅しているのだから彼の言う「代表」はポーズに過ぎない。
- 3) 彼には自分の悩みが最大の関心事。エゴイストで泣虫である。
- 4) 『非政治的人間の考察』を生んだのはルサンチマンに満ちた非合理主義とノイローゼ。そこで言われていることはファシズムの先ぶれだ。
- 5) 政治を論じる彼の言葉は審美的なものだ。彼は民衆 (Volk) を大衆 (Masse) という考えでとらえる。作品では民衆は端役でしか出てこない。
- 6) 彼が語るのは全て自分のことだが同時に自分を隠蔽している。その手段がイロニーだ。イロニーは彼の無能を隠す道具なのだ。彼の言う中間のパトスとしてのイロニーは現実には役立たない。イロニーは支配の身振りなのだ。
- 7) マンは支配への欲望をゲーテによって満たした。
- 8) 彼の好みはブルジョア的なものである。彼はそれを特権としてではなく重荷として描く欺瞞を行っている。
- 9) マンの作品は男性中心主義的で、女性の登場人物は機能的に男性に従属している。彼の作品の基音はホモセクシュアルなもので、女性の性は単純で自然主義的にあらわれ、また作品を危うくするデーモンとしてタブー化されている。
- 10) マンにあって最大の違和感を起こさせるのは、作品に彼が生きた時代の痕跡がほとんど見られないことだ。登場人物は操り人形同然

だ。言語的にも冒険を行っていない。回りくどく薄っぺらな擬古典主義だ。『ブッデンブローック家の人々』は真の傑作だが、リアリズムの手法で書かれ19世紀に属するものだ。その後の彼はブルジョアのヒューマニズムを言葉でのみ基礎づけようとし、支配者の道具となった。今日マンを祝おうとする者は彼を必要とする者（支配者）なのだ。

ざつとこんな調子である。次にやはり彼が仕掛人になった北ドイツ放送のアンケートを少し見てみよう。まずその質問の文面は以下の通りである。

- 〈1. トーマス・マンが死んで20年たった現在、あなたにとって彼の作品はどんな興味を有するのでしょうか。〉<sup>9)</sup>
2. トーマス・マンはあなたの作家としての成長にどんな意味を持ちましたか。そして特に職人の<sup>ハントグゼル</sup>手仕事という観点から、あなたご自身の仕事への影響をお認めになりますか。
3. 一般的な評価では、トーマス・マンは彼の時代の偉大で代表的な作家、今世紀ドイツ文学の唯一争う余地のない古典作家（Klassiker）と見られています。あなたはこの評価を適切なものと思われますか。〉

素人が見てもこの質問にある種の方向づけがひそんでいることは明らかである。作家というひねくれた人種が、自分に影響を与えたものを素直に語るかという（R. -Ranicki のアンケートについても同じことが言えるが、彼は質問の文面を簡素にすることでその弊をできる限り避けている）こともあるが、特に問題なのは三番目のそれであって、「一般的な評価」と銘うってマンを一旦持ち上げておくのは戦略性に基づいていると見るしかあるまい。「唯一争う余地のない」という形容は仮にマンに好意的な人であっても簡単に首肯し得るとは思われないし、第一、戦後の西ドイツでのマン評価は上で述べたように「争う余地のない」どころの話ではなかったのである。加えて「古典作家」という言葉がまた——回答者たちの反応を見ても分かるように——含みの多い表現なのだ。

この三つの設問への答は無論作家によって様々である。だが既に質問自体にある方向性が含まれている以上、回答も全体としては共通した色に染まってくるのは避けられない。そして中には質問者の意図した通りの答を出してくる、言わば素朴な作家もいる。例えば西ドイツの女流作家 Giesela Elsner (1937- ) の回

答はおよそ次の通りである。

《トーマス・マンの生誕100年を機に、いわゆる若手の作家たちの意見を拝聴しようとするという事実そのものが、私には問題のあるところだと思う。まるでこの国では、文化批評の面からの彼への評価が余りに単調なものになることを恐れてでもいるかのようだ。再び対話を始めるためには、この死体を冒瀆しない訳にはいくまい。（段落）（…）彼（マン）は問題のあるテーマを一度も取り扱わなかった。彼がしたのは、面白い人物たちをうまく成功するように、言葉の悪い意味で味をつけて、比較的爽りの少ないやり方で登場させ演出することだった。登場人物たちに共通しているのは、読んでいると彼らと知り合いになりたいと思われてくることで、こういった望みはハインリヒ・マンの Diederich Heßling や Napoleon Fischer、プレヒトの Peachum 氏や Coax 氏の場合、どの読者にも起こりようがないのである。トーマス・マンの長篇小説を読むとのんきな気分になると私はいつも思ってきた。（段落）（…）トーマス・マンは、何故『ブッデンブローック家の人々』でほんの暗示程度でもいいから一家没落の経済的原因について意見を述べなかったのか、そうする価値があると思わなかったのか。『魔の山』では事典的に体の機能について述べているし、『ファウストゥス博士』ではテオドーア・アドルノの指導のもと音楽理論の研究に励んでいるというのに。ヨーゼフ小説を彼は経済危機のさなかに心安らかに書き出すことができたが、このことに嫉妬を覚えるのは私一人ではないだろう。彼を病床に伏させることができたのは、経済危機よりむしろ作品への酷評だった。彼に神経を使わせたのは兄ハインリヒの窮状より使用人とのもめ事の方だった。兄への彼の援助はいつも「一応」という感じのものだった。プレヒトは彼を特に爬虫類と呼んだ。要するに、トーマス・マンは彼の作中人物とは正反対に、知り合いになりたいとは思われないような人物だったのだ。（段落）いま彼ははるか上方の代表的な高みに君臨し、不死の状態に、精神の王の位にある。その高さは世界ばかりか神とすら等しいかと思うほどである。批評家集団はせっせと機械的な勤勉さで彼の台座を更に高くもたげようとしているが、そうなっても彼は目

まいがしたり足指がむずがゆくなったりはしないのである》<sup>9)</sup>

次はやはり西ドイツの作家 Wolfgang Hildesheimer (1916- )の意見である。

《1. 興味はない。

2. どんな意味もない。影響も受けていない。  
3. 「古典作家」という価値基準は非常にポピュラーなものである。私はそれについて考える時間も意欲もない。なぜなら古典作家ならば、愛着がなくとも読まなくてはならないだろうからだ。5年ごとに再読しない作品についてはそもそも判断など下せるものではない。既に評価の定まった本は批評家たちが再読しないせいで、誤った判断が沢山まかり通っている。私はトーマス・マンを楽しんで——文字通り楽しんで——読んだ。いま当時の読書を思い返してみると、Hans Egon Holthusen のずっと以前の論文が思い出される——と言っても私が彼といつでも同意見という訳ではないが。彼はトーマス・マンの何かの本について「超越なき世界」という題の論文を書いていた。「内省的な」人間ととられる危険性を承知の上で言えば、私もそう思うと言わざるを得ない》<sup>10)</sup>

もう一人だけ、オーストリアの作家で作曲家・歌手・画家もかねるという Gerhard Rühm (1930- )の回答を紹介しておこう。

《1. 興味はない(またはごく僅か)。

2. どんな意味もない。影響も受けていない。  
3. 誤りだと思う。私がトーマス・マンよりはるかに高く評価する今世紀前半の散文作家を少しだけあげるなら、Carl Einstein (Bebuquin!), Franz Kafka, Alfred Döblin, Walter Serner, Melchior Vischer (脳をめぐる瞬間 (Sekunde durch Hirn)), Paul Scheerbart, Carl Sternheim (物語作家としても!), Kurt Schwitters (散文においても)。更に Robert Musil と Heinrich Mann もそうだ》<sup>11)</sup>

こうした回答をこれ以上羅列してもそれほど意味があるとは思われないので、3.の設問について回答を統計的にまとめてみよう。ただし、統計であるから少なからず細部を切り捨てる形になることをお許しいただきたい。○×式のアンケートではないから答え方のレベルは様々であるし、微妙なニュアンスをこめた発

言も少なくないし、上で紹介した G. Elsner のように三つに設問にこだわらずにまとめて答えている作家もいるからだ。読み方次第では以下の数字も多少異なったものになるだろうことを承知の上、おおよその傾向として理解していただきたい。まず「争う余地のない今世紀唯一のドイツ古典作家か」という問いに対する答であるが、

そう思う、高く評価する	6
「古典作家」という概念に限定を	
つけた上で肯定	3
偉大だが他にも偉大な作家はいる	7
彼より偉大な作家がいる	6
偉大などではない、興味なし	10
評価について明快な答なし	5

次に、トーマス・マンと同等、もしくはそれ以上に評価された(好むというものも含めて)作家・詩人の名で3人以上に挙げられたものは、

Kafka	14
H. Mann	14
Brecht	13
Musil	9
Döblin	4
Hesse	4
Rilke	4
J. Roth	4
Benn	3
Hauptmann	3
Hofmannsthal	3
Sternheim	3
R. Walser	3

さて、問題の「古典作家」という用語であるが、この言葉への回答者のコメントを少し見てみよう。女流詩人 Hilde Domin (1912- )は次のように言う。

《今日古典作家とは何だろうか。時々グループ47 (アイヒ、パッサマン等)の作家が既に「古典作家」と言われている。エンツェンスベルガーは書いている。「古典作家たることの不安はどこから。/或いはどこへ」私は次のように書いたことがある。「こうした一種のルネッサンスを形作った者たちの名は既に早すぎた古典として周縁部へと後退している、彼らがまだ比較的若いにもかかわらず…」従って古典たることは、トーマス・マンがはるか遠いものになり、全く読まれなくなるとい

うことでもあるのだろうか??>」<sup>12)</sup>

作家 Rolf Schneider (1932-) のこの点での言い分はこうである。

〈トーマス・マンは疑いもなく一時代の代表者であった。(…) それ故彼は古典作家なのか? ただ一人の? そもそも古典作家とは何だろうか。この言葉もきょう日ひどいインフレに見舞われていて、記念碑的なものとくねくね曲がったもの (Mäander) とを同時に連想させる。ゲーテは記念碑だった、それも本当に代表的な。だが後世の文学へより大きな影響を残したのは、ゲーテの同時代人クライストとヘルダーリンの方だった。トーマス・マンはゲルハルト・ハウプトマンからゲーテのうぬぼれを継承したが、恐らくそれ故にこそ単なる名誉欲に駆られた市民だったということだ。このところ流行になっているように、影響力の完全な欠如を古典的ということに結びつけるのなら、トーマス・マンは明らかに古典作家である。(…) 現代文学へのインスピレーションはトーマス・マンからは得られないと言ってよい。今世紀ドイツ文学の、影響力を現在も将来も持つであろう争う余地のない古典作家を問われるなら、フランツ・カフカの名を挙げなくてはなるまい>」<sup>13)</sup>

これに I で紹介した A. Muschg の 1975 年の回答 (R. -Ranicki のアンケートにも北ドイツ放送のそれにも同文で答えている) を加えてみれば、「古典作家」という言葉に含まれる多義性、或いは戦略性が見えてくるだろう。一方でそれは卓越した作家という、単なる価値評価をあらわす言葉として用いられるが、他方ではそこには現在とは無縁のブルジョア社会の記念碑、額縁に入れられるべき骨董品というニュアンスがこめられている。従ってこの質問には、攻撃対象を「一般の評価では」と称して一旦持ち上げておくという戦術の他に、ひそかに攻撃に用いる道具を相手に手渡すという二重の意図が含まれていると考えられる。

先に述べたように H. Wysling はのちにこの時代の反トーマス・マン論をまとめる作業をしているが、そこでマンのイロニーが「キリスト教の側からも、マルクス主義の側からも」非難されていると書いている。<sup>14)</sup> マン批判は大きく分けるとこの二つに分類できるだろう。但し「キリスト教」には、しばしば神秘主義的・超越論的な文学 (観) が含まれ (上で Hildes-

heimer が Holthusen の論文名を引きつつ言っていたことを想起していただきたい)、「マルクス主義」には広義の反権威主義的思考が含まれる。私は北ドイツ放送アンケートの結果を統計的にまとめたが、そこで「マンと同等もしくはそれ以上の作家」として挙げられた上位 4 人の名はそうした傾向を証明するものと言える。カフカとムージルは前者と結びつくことが多く、H・マンとブレヒトは圧倒的に後者となつがっている。尤も必ずしもこの二つの傾向が明確に分かれるというものでもなく、融合していたり、カフカが後者でも使われるといった場合もある (I での Kunert の回答を想起されたい) し、もとより政治的な立場と文学的感性はしばしば未分化のまま表出されがちなものだ。そうした傾向が特に 70 年代の西ドイツの反権威主義的時代風潮にあって助長されたことは明らかである。この種のものの見方の元凶はルカーチ (評価の方向は正反対であるけれども) であろうが、ここではその点に立ち入る余裕はない。ここでつけ加えておきたいのは、R. -Ranicki が最近『トニーオ・クレーガー』について講演をする際、上のような風潮を十分踏まえた上で行っているということである。作家 Martin Walser の「『トニーオ・クレーガー』は今世紀ドイツ語で書かれた最悪の短篇だ」という意味の 1975 年の発言を出発点としたこの講演は、マンの代表的短篇とされるこの作品がいかに特異で非芸術的な小説かを論証した後、H・マンには冷淡だったカフカがこの短篇を愛読し大きな影響を受けたこと、今日でも、また社会主義圏にあっても『トニーオ・クレーガー』が好まれ模倣されている事実を指摘している。<sup>15)</sup> トーマス・マンの属した時代や社会階層という視点からのみ彼の作品をとらえ、現代文学への影響力のなさ=作家としての格の低さという筋道をたどりがちなマン批判への反駁を、R. -Ranicki の平明な論の中に見てとることができるのである。

次に、〈text+kritik〉シリーズの『トーマス・マン』の中にあらわれた反トーマス・マン論を少し見とおこう。まず冒頭に載せられた Martin Walser の「最高の食糧としてのイロニー、或いは至高の人々の食糧」<sup>16)</sup> であるが、これは『魔の山』執筆期を境にマンのものの考え方に根本的な転換があったということ、小説やエッセイ、特に『ゲーテとトルストイ』をもとに論証しようとしたものである。論は必ずしも

直線的に進んではいかず、マンは右も左も一遍に抱え込もうとしているとか、ハンス・カストルプの生活は階級的なムツのよさに発しているなど批判的言辞がちりばめられているが、彼のここでの意図は、第一次大戦までは、満たされない欲求を胸に抱えたアウトサイダーたちの側に、シラー・ドストエフスキー的な「精神」の側に立っていた筈のマンが、大戦後の経過の中で、恵まれた自己充足的な人間、ゲーテ・トルストイ的な「自然」の側に立つようになったということを指摘し、その転換を階級的保身の術策に由来するものとして非難するところにある。Walser は、マンがゲーテについて語っている時それは自分について語っているのだとして次のように言う。

《この神はそれ故イロニーに彼の領域、すなわち絶対的な芸術の高みに破壊的なほど寛容に君臨し、人々は信頼を持ってと言われる、それも「恐るべき」信頼を。(…)彼はナルシス的な、おそらくは支配者である両親の家で生まれた身体の敏感さからのみ早々とそして長々とデカダンス——と病気のイデオロギーとを編み上げていたから、最初から自分に満足して輝いていると自称している人々とは無縁だと思っていた。しかし無論彼は最初から長い寿命を自分のために望んでいた。しかし彼は繊細でありたかった。そしてポヘミアンやアンガージュする文士たちから攻撃された市民性が彼の身上だったから、天才に通じている病弱さでもって自己のアイデンティティを養うことができると考えた。その後いつか彼は自然の側に通じる道を発見した。口先だけの観念的な祈りにかけては名人級の彼も、敢えて考えることができなかつたような道であった。アウトサイダーにアイデンティティを見いだしていた富裕市民の息子がかつて恐る恐るそう思っていたほどには、ゲーテとトルストイは道徳的ではなかつたし、そもそもそれほど善でも健康でも、また全然ノーマルでもなかつたという訳だ。この素朴な人々、自然の息子たちは暗く問題的で悪に通ずる面を持つ、と今や彼は考えるようになる。自分自身もまたそうなのだとは彼は感じるようになる。そして彼は徐々に老いてこのきわめて象徴的な年齢に近づいてゆく。だがとりわけ悪意や暗さや中立性やイロニーなものが彼に教えたのは、別段「精神の子」である必要はないということだった。そ

の理由というのはただ、何十年間か死とのいちゃつきや病気やデカダンスを用いて、そしてそれを搾取して、繊細さや芸術家気質等々を築き上げてしまったからなのだ。それ故に、「自然の子」ゲーテとトルストイの非模範性のお陰で、彼は向こうに達することができた。彼が自分にはないと思っていたく嘆いていたもの、それ故二十年の長きに渡ってイデオロギー的に補償せんとしてきたもの、すなわち野生味に、ここでついに「自然的妖怪的なもの」の持つ暗い特質がとってかわることになる。「俗人」にはこの複雑な問題に加担することは禁じられる。(…)そして最も重要なことだが、どちらかと言えば小市民的な精神の子たち、病人、文士といった人たちは、向上を願う者であり改良を目指す者であり、「願わしいことの成就」に力を注ぐ者であるから、まさにそれ故に、マンお気に入りの富裕市民的貴族的なゲーテ・トルストイといった巨人たちはそれに属さないのである。彼らは神々しいまでに高貴なのだ。そしてそうした巨人の持つ無関心さを得るためのライセンスがイロニーと称される。包括的な、自然的妖怪的なイロニー。だが、イロニーのソクラテスの起源とキルケゴールによるその革新を想起するなら、次のことが分かる筈だ。動きをあらゆる概念、破壊的なまでに批判的である作業概念から、歴史に敵対するイデオロギーを許容し自己聖化する言葉がでっち上げられているということが。(段落) こうして「厄介息子」カストルプの著者は、文学者としても社会人としても「優等生」だったゲーテ叙述者へと発展してゆく。ヒトラーのお陰でこのゲーテ叙述者の口から出たことは、一時期予定を狂わせはした。だがあくまで一時期のことである。彼の反ファシズム的行動によい点を与えたりすれば、彼を過小評価することになる。まるで彼には全く別のことも可能だったともいうかのようだ。彼は自分の階級に忠実に振舞ったのだ。彼は自分の階級に一種の神話を、自己聖化に用いるようにと提供し、自らも範を垂れてみせたのだ。(…) こうしたことは、彼がこの歴史に敵対する行いで自分の階級の要求をほめそやす以外のことはしていないが故に、一層やすやすと成し遂げられたのである》<sup>17)</sup>

次が Hanjo Kesting「死にいたる病。音楽とイデオ

ロギー」である。<sup>19</sup> 彼はマンにとって音楽とはヴァーグナーに他ならなかったことを指摘し、マンの音楽解釈が肯定的なものであれ否定的なものであれ、それ自体イデオロギーではないか、と問題提起する。Kestingによれば、マンの初期作品の主人公たちは皆ヴァーグナーの音楽と関係を持っており、彼らはアウトサイダー的ではあっても社会的には恵まれた階層である。語り手の音楽描写にイロニーが含まれていてもそれは方向性を欠くもの（perspektivenlos）なのだ。そしてKestingは、これと対蹠的なものとしてハインリヒ・マンの『臣下』におけるヴァーグナー描写を挙げ、ヴィルヘルム朝ドイツの市民の内実を暴くものだとした上で次のように言う。

《この描写は風刺的である。ハインリヒ・マンはヴァーグナーの音楽を社会的な文脈の中におくことによって、単に俗物の正体を暴くのみならず、ヴァーグナーの誤用を明らかにし、それによってヴァーグナーを救うことができているのだ。トーマス・マンのイロニーにはそれができない。彼はイロニーによってブルジョア金満家やビスマルク的ドイツ人にも、病的な唯美主義者にも距離をおく。だがそうしたところでクレターヤーンの徒もシュピネルの徒も論駁された訳ではない。論駁されているのは高々ヴァーグナーの音楽だけだ。なぜなら、こんな曖昧な解釈を許す音楽とはどういう音楽なのか。意気揚々たる市民階級を聖化し、没落してゆく市民にも刺激的な麻薬の役割をつとめる音楽とは？ しかしこうした問いは結局ヴァーグナーに対しても不当だろう。だからトーマス・マンのイロニーは無責任で曖昧なのである。ハンノ・ブッデンブロークを破滅させたあの闘いでは「中間の位置」は機能していない。結局中間の位置とは、社会の矛盾の中で生き抜くか、或いはヴィルヘルム帝国の現実に心地よく順応するための快適な手段に過ぎないのだ<sup>20</sup>》

それからKestingは、『考察』へのマン自身の評価が「転向」後も変わらないことや、第二次大戦後になってもヴァーグナーへの懐疑と熱中は続いていることを指摘した後、音楽とエロスの関係に立ち入る。音楽が抑圧されたエロスの代償でありエロスそのものであることをマンの作品からの具体例で述べ、結論的に次のように言う。

《性病は『ファウストゥス博士』の中では、音

楽、市民文化、ドイツ、そしてドイツの歴史への「感染」の象徴として、悪魔ヒトラーとの契約、ファシズムのテロル支配の象徴としてあらわれている。脱出口は示されていない。性的なものがタブーとされているように、市民文化以外の文化についてもなんら言及はされていない。市民文化の進歩的な遺産——ベートーヴェンの第九交響曲——はそれどころか「撤回される」のだ。なぜなら、トーマス・マンが代表性への飽くことなき志向をもっていつでもしてきたように、——帝国でのリベラルな市民として、第一次大戦での好戦的なナショナリストとして、共和国のイロニーニッシュな教育者として、そして亡命中でさえ（「私のいるところにドイツ文化がある」）——つまり彼がいつでも代表してきたように、彼はこの小説の中でも自己とその階級を、この階級の精神的遺産と無能を、ドイツ全体に同化させるのだ。彼が結局そこから距離をとっていることを我々は非難しないでおこう。だがほめる訳にもいかない。なぜなら少なくとも彼にとっては何一つ変わったことはなかったのだから<sup>20</sup>》

このアンソロジーからもう一つだけ、Yaak Karsunke（1934- ）の「『…特別でありたいと思う莫迦げた欲求から』——トーマス・マン『ヴェニスに死す』再読」を取り上げよう。<sup>21</sup> ここには、西ドイツ70年代の反体制的政治的雰囲気や文学の読みどどのように影響しているかが、先の二論文にもましてあからさまにあらわれているからだ。例えば彼は『ヴェニスに死す』の冒頭半頁ほどを引用した後、次のように「読む」。

《我々がアッジェンバハについて（名前の後に）知る最初のことは、彼が五十歳の誕生日に貴族に叙せられたという事実である。この事実テキストはこの先まだ二回舞い戻ってくる。一度は「即位したばかりのドイツの君主が」詩人の「五十回目の誕生日に一代限りの貴族位を与えた」ことが記述され、別のところではこうした榮譽を与えられた彼が「自分の貴族位のことを思い出す」ことになる。それからすぐにアッジェンバハの仕事の性格について若干のことが伝えられる。——ただしその内容については何も伝えてもらえないが。彼の仕事は困難で危険で、最高の注意深さと用心、意志の集中と綿密さが必要であるという——それがどうしたというのか。危機の時代の外交官の仕

事にしてもそっくり同じように言いかえられるだろうし、アルピニストの労苦にしてもそうだ。その次の文はアッシェンバハを作家だと言い、特徴的なことにキケロの「雄弁」を通して正当化される。教師ぶった身振りで持ちだされたラテン語の知識 (Bildungsfrucht) が示してくれるのはさしあたっては次のことだけである。つまり、著者はキケロをめくった (anlesen) ことがある、少なくともこの箇所だけはということだが、——私には次のことをはからずも漏らしているように思える。作家の「危険」なまでに高度に様式化された仕事は、結局その核心においてどちらかと言えば修辭的な (rhetorisch) 作業として描かれているのだ——修辭的とは、ドゥーデン大辞典が「紋切り型の、美辭麗句的な」という訳を提案している外来語である。<sup>25)</sup> アッシェンバハ内部の「止まらぬ駆動装置」は言わば空回りを演じさせられていて、高々大仰な一行ごとの苦役を作り出すに過ぎない。「仕事を中断して疲れを癒す午睡をとることができなかった」ので結局「野外に出て」きはしたが、それでも「有益な」晩のフェルト製スリッパ以外のことは考えていないのである。<sup>26)</sup>

読み手の、言うなら品性の下劣さを露骨にあらわしているこういった論考(?)は、編集者の質とこのアンソロジー全体の性格を象徴的に暗示していると思われる。上記の引用だけで十分であろうが、結末部分を少しだけ紹介しておこう。Karsunke は最後に、『ヴェニスに死す』とほぼ同時代に書かれたハインリヒ・マンのエッセイを引用する。権力にとりいり自分を民衆の上に立つものと思ひ込む作家を精神の敵対者として非難したもので、この中に Karsunke の論題である「特別でありたいという莫迦げた欲求」という言い回しも出てくる。そしてその後彼はしめくくって言う。

《この文はハインリヒのエッセイ『精神と行為』の最終段から取ったものである。ハインリヒの生誕 100 年記念祭は 4 年前に行われて然るべきだった——だがその時はドイツ帝国の 100 年記念祭が行われた。それに対して今年のトーマス・マン記念祭はどこでも大盤振舞いで行われている——祝っている者はその理由を知っている筈だ。トーマスが『ヴェニスに死す』を著した時ハインリヒは長篇『臣下』に取り組んでいた——ドイツの臣下

たちには今日に至るまで、民主的な作家より大作家 (Dichterbürst) の方が好ましいのだ》<sup>24)</sup>

反トーマス・マン論の後には反・反トーマス・マン論にも少し触れておこう。上で言及した Wysling や R. -Ranicki の論もその一つであるが、反トーマス・マン論の先陣をきった 1975 年 5 月の「シュピーゲル」誌の Kesting の論考には、ただちに反論が提出された。2 週間後同誌に掲載された作家 Rolf Hochhuth (1931- ) の「トーマス・マン、或いは曾孫の忘恩」である。<sup>25)</sup> 彼は、マンがドイツにおいて代表的な作家だとされているという Kesting の戦略的な前提をとらえて次のように指摘する。

《Kesting がもう 10 年早く生まれていたら、彼の言うのとは逆に西ドイツとマンとの関係が悲惨 (miserabel) 極まりないものだったということ思い出しただろう。——「悲惨」とは、マンが、彼の兄の死に際してすら Heuss も Adenauer も自分に悔みを言おうとしないという事実コメントして語った言葉である。(段落) ボン政府は一度も——Pankow 同様<sup>26)</sup>——少なくとも二人の叙事作家のうち一人に帰国を要請する試みを行わなかった。プール・レ・メリット協会<sup>27)</sup>に「相応しい」とされたのはマンではなく、キリスト教戦後文学のエピゴーネンの筆頭たる Schröder と Bergengruen だった。ずっと後になって——つまり彼の死の二日前になってようやく——マンは入会を認められたのだ。それも、55 年 5 月に今一度ドイツに外交上の信任状、つまりシュトゥットガルトのシラー講演を届けたからというだけの理由でであった。(段落) この頃ドイツの西半分も自分たちがこの亡命者にした仕打ちをげに訂正し始めた。マルチパンによってばかりではなく——1901 年以来——『ブッデンブローク家の人々』によっても世界中に名が知れ渡ってきたことに 55 年もの間我慢がならなかったリュベックですら、「大急ぎで」放蕩息子に名譽市民にしようとした。彼の死の 12 週間前のことだ。この自明のこのために市議会で多数を得ようとのそれ以前の試みは、いつも挫折していたのだ。(…) マンを名譽市民にするために自民党、ドイツ党、社民党は気が進まないながらも集まったが、キリスト教民主同盟の議員団はその会議を断固としてボイコッ

トした。(…)(段落) Kesting は、西ドイツも東ドイツも一緒になって彼の生誕 100 年を祝していることをいかかわしいとしている。ならば、ブレヒトの生誕 75 年に右も左もヴェラ川でにぎやかに、ほとんど一年を通して祝っていたこともいかかわしいと思ったのだろうか<sup>281</sup>

それから Hochhuth はおおよそ次のように続ける。Kesting が借りてきているブレヒトやヤーンやハンナ・アレントらのマン批判は、マンより一世代若い人々の反発という世代間対立の要素があったのに、彼はそれを無視している。ゲーテとマンに関することでの彼の批判の水準は低すぎる。「私のいるところにドイツ文化がある」というマンの発言が気に食わないと言うが、Kesting お気に入りのハインリヒ・マンもこの言葉を事実として受けとっていたのだ。第一ナチス時代のドイツには実際まともに文化と呼べるものがあつたらうか。自分はマンの作品を高く評価するし、文学史的にみてもその卓越性は疑えない。同時代の作家たちのマン批判には嫉妬が見えかくれしている。散文作家である彼を率直に認めたのが競合しない分野である詩にうちこんだリルケとベンであるのも偶然ではない。自分は戦時中にマンのラジオ放送を聞いて大変なショックを受けたのだ。ブレヒトの『ゼツァンの善人』が政治的文学だと言うが、マンの『掟』はどうか。エリオットの言うように、一時代をしめくくった者が古典作家なのだとすれば、マンはそうであつたし彼の時代を代表していたのだ。

「シュピーゲル」誌には読者投書欄があるが、上の Hochhuth の論考が載つたのと同じ号のこの欄は、Kesting の反トーマス・マン論への反応を特集した。(同誌の投書欄が自誌の記事への反応を特集するのはいつものことである) 一般市民から高名な学者まで 29 人の投書が掲載されていて、Kesting に同調するものもあるが、全体としては批判的なものが多数である。その中から二つを紹介しよう。まず、フライブルク大学ロマンス語学文学教授 Hans-Martin Gauger である。

《僅かの頁でトーマス・マンに関してこんなに的はずれで不正確で莫迦げたことを集中的に書けた Hanjo Kesting は賞賛に値する。せいぜい頭脳明晰にして学識ある Martin Walser (なにしろ哲学博士であるから) が Kesting と張り合えるくらいだろう。ちなみに Kesting は Walser の

言っていることの多くをそのまま復唱しているが。「マルクス主義者」を自認している(そのこと自体は結構だが) こうした方々に少なくとも一つだけ考えていただきたいことがある。ナチス時代には公式的に、その直後の時代には非公式的にマンについて言われたことと、上のお歴々の言っていることがほとんどそっくり同じなのはどうしてなのか。…ちなみに Kesting がマンが言ったとしている「生まれついで功績」という言葉はゲーテのものである。明敏な批評家がマンの「人を畏縮させる効果」に文句を言うのも、なるほど彼自身のご立派な教養に鑑みるともっともである。この「畏縮」から逃れようという、ごたいそような動機から出てきた痙攣性の試みが 10 のテーゼなのだ。痙攣以外のものは生じようがないのである》

次に日本でも知られている政治学者 Kurt Sontheimer の投書である。これは写真入りで分量も多い上に枠で囲まれているから、投書の中でも特別扱いされていることが明瞭になっている。中心部分を紹介しよう。

《ある作家が階級闘争とか搾取とかいう言葉を口にする時のみ彼の政治理解を正当とするとは、何と反精神的で原始的な見方であろうか。トーマス・マンが 1933 年に政治的な方向感覚を失っていたとは、何と不遜な主張であろうか。彼は災厄が迫り来るのをずっと前から予見していたし、1930 年には『ドイツの呼びかけ——理性に訴える』の中で社会民主主義に賛意を表してドイツ教養市民層の怒りをかっただのだ。ナチスが彼の本を焼き彼を亡命に追いやり彼の市民権を剝奪したという事実がありながらこうした事実無根の論を張るとは、何と言語道断なことであろうか。ナチスが権力の座についた時、言われているようなマンの政治的機会主義がどこにあったというのか。マンは 1949 年のゲーテ講演をフランクフルトばかりではなくヴァイマルでも行うことに固執して、西ドイツの政治世論を憤激に沸きかえらせたものだが、そのどこに機会主義があるというのか。(段落) Kesting 氏は、マンがいつも自分にあるとしていた市民性をけなすために、どうあつても『非政治的人間の考察』を保存しておかなくてはならないばかりか、それを無茶苦茶でファシズム的なもの



だと歪曲しないではいられないのだ。市民階級に帰属しその精神的武器をもってその階級の誤りに立ち向かうことが、一体犯罪なのであろうか。イロニーを「支配欲」とは何と莫迦げた理解であろうか。イロニーとは、人が一つのことを確実に所有し得ないこと、完全に制御し得るとは思わないことを表現しようとするものではないか》

\*

1977年に『トーマス・マン研究史1969-1976年』を著した Hermann Kurzke は、その「今日のトーマス・マン理解をめぐる一般的な状況」の項で次のように書いた。

《トーマス・マンは西ドイツでは戦後ドイツ文芸学の、とりわけ「作品内在解釈」派の好んで取り上げる作家に属していたから、この流派が60年代終わりに退潮した時マンが頻繁に扱われることもなくなるかに見えた。だが実際はその逆であった。彼の作品は積年に渡る視野の狭い受け入れられ方に少なからぬ抵抗力を示し、新しい読みの期待に十分答えたのである。確かにここ8年間「批判的文芸学」が台頭し、当座はこのゼウスの玉座を揺さぶった。彼らは「反動的なもの」を探し発見した。彼の1914年から18年にかけてのナショナリスト的保守的な文章を読み、1922年の民主主義への転向を疑い、1933年から36年までの沈黙と、人民戦線に対してとった距離を批判し、それをだしに使ってハインリヒ・マンを賞賛し、ムージルやブレヒトのあてこすり——マンは「大作家」(Großschriftsteller)だ、マンはドイツを金の払える読者層としか想像できない「爬虫類」だ——を引用した。しかしそれはそれだけで、左翼によるマンの清算は学問的な文献の中には存在しなかった。(…)多種多様な論難に対してマンの人と作品は、辛辣な批判のうちにも市民の立場にもう一度ヒューマンな生の可能性を取り戻そうという、厳格で倫理的な努力の証人として立っている》<sup>29)</sup>

同じ本の中で Kurzke は、「シュペーゲル」誌に載った Kesting のマン批判にも触れている。彼はこの批判を、全く下らないとは言えない、ただ余りに一方的で歴史を顧慮していないと述べ、批判されているようなところは確かにマンの中に幾分かはあるとした上

で次のように言っている。

《イロニーを例にとって簡単に言おう。19世紀の市民社会は自由や平等や寛容などの目標を上層部にだけ達成したが、そのとりわけネガティブな経験は、市民の言葉使いの中にも入り込んで、かつては進歩の代名詞となっていた言葉や態度に対する美的不信感をあらわすものとなった。例えばセテムブリーニ流のパスへの批判は単に反動的なものなのではなく、100年も前から言葉の域を越えることがない立場を撃つものなのである。初期ハインリヒ・マンの、「精神=行為」という言葉だけのラディカリズムに対して、トーマス・マンの批判は疑いもなく一定の美的正しさを持っている。市民的な理想が信じられなくなり、しかし他の理想が使えそうにない時、あらゆる立場をイロニーニッシュかつ唯美主義的に相対化することは、理想を保持しているにもかかわらず、或いは保持しているが故に、論理的な帰結なのである。それは単なる決断からの逃避なのではなく、正当な懐疑主義でもあるのだ。極めて繊細なヒューマンイズムの要求に応じられそうな党派がないのに、選択のみ迫られるところでは、イロニーは、満足を実現し得ない決断への留保を保つ。それ故イロニーとは、〈決定における確実さの欠如〉を跳び越えるだけで再現しようとしないう決断主義への、敵対者である。イロニーと決断主義はどちらも市民の態度で、互いに相補的なものなのだ》<sup>30)</sup>

Kurzke の態度は、この時代のマン批判に対してマンを擁護しつつも、それ自体かなり社会的なものの見方に支えられている。事実彼は同書の別の箇所でも次のように言う。

《イデオロギーとは無縁の宙に浮いたマンの存在は、しばしば様々な決まり文句の中にあられる。二律背反、二重の観点、両方の側へのイロニー、決定不可能性といったことが、支配的なマン像の特徴として知られている。だが単なる決定不可能性とイデオロギーからの完全な自由とかは全く抽象的で空虚な立場である。そうしたもので生きられるのは高々芸術家だけで、絶えず現場で決断を下さなければならない一人の人間ではない。人間としてのトーマス・マンは彼の人生の中で、自分の政治的発言が持つ必然的凡庸さへの美的疑念にもかかわらず、かなりはっきりと民主主

義とヒューマニズムの側に加担した。創作における美的要求はこれより厳しいものであり、事実宙に浮いて決断を下さないものへと至った。(…)彼は、帝国も社会民主主義もルーズヴェルトのニューディールも東側の社会主義も、彼の美的ユートピアが欲しているようなヒューマンな社会を実現できないと知っていたのだ》<sup>32)</sup>

こうした見方は、社会的な観点が氾濫していた70年代西ドイツが強いたものとは必ずしも言えない。むしろ Kurzke の個人的資質によるところが大きいように思う。彼は1985年に著した『トーマス・マン。時代一作品一影響』の中では、70年代を振り返って次のように書いているからである。

《あの時代の精神的 雰囲気は、〔生誕 100 年記念の〕特別なトーマス・マン受容には基本的に向かないものだった。学生運動にともなって、70年代の新聞雑誌に燎原の火のように広がった進歩主義・解放・社会民主主義・社会主義にかかわる諸理念は、後期市民トーマス・マンのイローニッシュな懐疑主義を受け入れるに相応しい共鳴板を提供するものではなかったのだ。(…)社会主義革命、プロレタリアの新しい文化への期待がさしあたり根拠を失ってしまった現在、市民の諸理念の中に自分がひき戻されるのを多くの人たちが感じている。彼らの言う市民性とは、獲得や進歩や自然からの解放のためには何でも犠牲にするつもりでいる市民性なのではなく、市民的個人主義によって、自己批判と良心の探求からなる文化を發展させてゆく市民性なのだ。精力的な征服者ではなく、繊細な懐疑主義者がアクチュアルな市民のタイプである。市民性は固定した <sup>ポジティブ</sup>立場としてではなく、批判への <sup>ダイスポジティブ</sup>構想としてあらわれるのだ。(段落)トーマス・マンほどに、市民性とそれが持つ批判が二つながら納得のいく形で結びついている者はない》<sup>32)</sup>

こうした Kurzke の分析にある程度の説得力を感じつつも、幾分かの不満を覚えるのは私だけだろうか。確かに文学作品の受容は社会的な条件に大きく左右されるもので、純粋に芸術家として生きられる人間などある筈もないのと同様、純粋に芸術的に受容される作家など存在しないだろう。だからある作家の小説の中に作家自身及び読者の満たされ得ぬ社会的願望を見るのも悪くはない。

だがそれはあくまで限られた一つの側面に過ぎない。マンの場合、その小説と(特に後期の)評論や演説用原稿との間にある深い溝を単に社会的願望が実現可能か不可能かという面からのみとらえることは、特に小説に対して不当な見方ではなからうか。もし Kurzke の言う通りであれば、理想的な社会が実現されれば誰もマンなど読まなくなってしまうことになる。マンだけならいい。時間つぶしの読物以外は全滅ということになる。果してそうだろうか。ここで前述の R.-Ranicki のトーマス・クレーガー論を再び見てみよう。その結論部分で R.-Ranicki は次のように述べている。この短篇は故郷喪失者の、或いは「文学」という故郷をかりうじて見いだした者のバイブルとなった、と。<sup>33)</sup>ここに見られるのは、ある共同体に受け入れられない、もしくは入ろうとしない者の慰め手としての文学というところである。そしてヨーゼフ四部作、ゲーテ小説、ファウスト小説などのことを考えてみる時、そこに大衆とは違う領域に住む芸術家という共通した設定、或いは観念が一貫して存在することに改めて気づかないではいられないだろう。E・ヘラーが指摘したように、芸術家というものはエリート的な(トーマス・クレーガーは言わばマイナスのエリートである)ものの見方と切り離せないものだ。<sup>34)</sup>それを単なる社会現象に還元してことは済むであろうか。

75年前後のマン攻撃がもつばらマスコミ関係者や知識階級によって行われたことを想起してみよう。かの Kesting 自らが「シュピーゲル」誌に書いていたように、マンの作品は作家にはともかく普通の読者には受けがいいのである。とするなら、問題は時代時代の流行の波に乗りやすく、またマンと同じような仕事に従事しているマスコミ人・知識人のあり方とマンの作品との関係ということになるのではなからうか。86年にリュベックで行われたトーマス・マン・コロキウムで、75年頃のマン批判について辛辣な口調でまとめた Heftrich の報告の題が「憎まれた同業者」となっているのも偶然ではない。<sup>35)</sup>作家・学者・マスコミ人等にとってマンはまさしく同業者なのであり、そうした同業者のむき出しの憎悪をかいやすい(無論賛賞者も劣らず多いけれども)マンの作品の本質、そして逆に憎悪を形を変えて表明し続ける作家・学者・マスコミ人等の本質が問題とされなくてはならないのだ。無論一つには Hochhuth や Heftrich が言うように嫉妬

ということもあるに違いない。しかしそれだけでことが片づくとは思われない。上で Gauger が述べていたように、また H. Lehnert が同時期に指摘したように、<sup>96)</sup> マンに対する攻撃の内容は第二次大戦前から基本的に変わっていないのだ。なぜ同じことが繰り返されるのか、何故右も左もマン攻撃に関しては同じ論理を使うことになるのか、問題の鍵は（単にマンだけではなく、ドイツにおける右翼と左翼の問題を考える際にも）そこにある。

そうした問題に答えることは、現在の私の手には余る。ただ、歴史と文化背景を異にする日本に住んでいる我々としては、細かい状況の変化に一喜一憂したり軽率に追随したりすることなく、慎重かつ主体性を失わずにドイツの状況を見守るべきだという一般論を述べるにとどめておきたい。

実際、表面的な状況は目まぐるしく変化する。最近 Allenbacher Institut が市民向けに行ったアンケートの結果を「フランクフルター・アルゲマイネ」紙が伝えている。今世紀のドイツ作家中で誰が最も重要かという質問に対して、リルケ、ムーゼル、ブレヒト、カフカ、ベンとの選択において、トーマス・マンを挙げた人が多数だったという。コメントを加えた Werner Fuld はこう書いた。

《明らかに少し前からトーマス・マンのイメージが根本的に変わってきたのだ。とりわけ日記の刊行が、近寄り難い「魔術師」の背後に、苦しみや欠点、我々と同じ弱点を持った一人の人間の姿を浮き上がらせたのである。以前は彼は尊敬されても愛されなかったが、今日では人は尊敬を強制されることなく彼を愛せるようになった》<sup>97)</sup>

こうした状況も様々な問題点を抱えている。マンの作品が好まれているといっても、よく読まれる作品はかなり限定されていること、現代のギムナジウムの生徒には既にマンの作品のドイツ語が難し過ぎるものとなっていること<sup>98)</sup>などが指摘されている。今後のトーマス・マン受容がどうなっていくか、なお様々な変化が予想される。

最後に一つだけ報告してこの項を終わりにしたい。75年の反トーマス・マン論の口火を切った Hanjo Kesting の近況である。彼に対してマン擁護の論陣を張った Rolf Hochhuth が、最近エッセイ集『行為者と思索者』を上梓した。そこには「シュペーゲル」誌上で Kesting を批判した彼の文章が収録され

ているが、彼はそこに序を付してこう言っている。

《当時の私の論争相手の名はここには出さないでおこう。なぜなら彼はかなり前から、幾つかの卓越したエッセイの中で、彼のトーマス・マン像の根本的修正を図っているからだ。彼の若い時の仕事を意地悪くつつき続けるのはフェアではあるまい。（…）当時の若い反マン論者の名は再現せずに、ここでは「テーゼ提出者」とか似たような言い替えをしておくことにしよう》<sup>99)</sup>

Kesting が具体的にどんな修正をしたのかは、残念ながら不勉強な私には目下不明である。しかし13年前にあれだけ派手にマン攻撃をした人物が既に意見を変えているというのは、なかなか興味深い事実だと思う。

### III

翻って日本の状況について少し考えてみることにしたい。トーマス・マンに関する日本の文献は第二次大戦後に限ってみても膨大な量に上る。ここでは包括的なマン研究史や受容史を目指しているのではないから、限られた側面からのアプローチになることを最初にお断わりしておく。

大戦後のマン受容にとって決定的であったのは、彼が日本の同盟国であり同じく敗戦国となったドイツの出身であり、なおかつ故国から亡命し反ファシズムの側に身を投じて言論面で戦闘的に活動したことであったろう。昭和23年（1948年）1月1日付の東京朝日新聞にマンの「日本に贈る言葉」が掲載されたのを始め、戦後間もない時期の日本の新聞に幾度かマンの発言が掲載されたのも、<sup>40)</sup> 単に彼がノーベル賞授賞歴のある著名作家だからということではなく、上記二つの事情が彼をして敗戦後間もない日本人に言葉を贈るのに最も相応しい作家だと思わせたのだった。

こうした当時の日本特有の時代精神とマンのある側面との言わば蜜月関係を強力に押し進めたのが、ゲルマニストの佐藤晃一であった。東京朝日新聞にマンの言葉が掲載されたその年に東京大学独文科助教授に就任した彼は、デモクラット・トーマス・マンという基本的把握を終生崩すことなく、この作家の研究と翻訳書や研究書の出版に情熱を傾けることになる。

この時期に佐藤晃一が日本独文学界の要衝を占める地位についたのは、無論第一に彼がそれに相応しい実

力を持っていたからであろう。私は勿論彼の実像については何も知らない。しかしただ時代の流れに合致する研究をしているからというだけでつける地位でないことは明らかである。高橋義孝によれば佐藤 晃一は「トーマス・マンのビブリオグラフとして世界的な人」だろうという。<sup>41)</sup> 最近西ドイツで出たマン研究の手引き書でも、外国におけるマン研究の「重要な仲介者」として日本ではただ一人佐藤の名が挙げられている。<sup>42)</sup> また、彼の書いたトーマス・マン論を読めば、当時入手可能な文献を最大限に活かして彼なりのマン像を築こうとしていたことはすぐに読みとれる。無責任に流行に乗じる輩と同列には扱えない。マンに関する学識では当時国内で最高の人だったことは疑い得ず、現在の日本のマン研究者も彼の築いた礎の上に立っていることは忘れてはならない点である。

そうした功の部分の認めることは、しかし彼の罪の側面を容認する理由にはならない。例えば山下肇との共著である『ドイツ抵抗文学』（昭和29年）の序文に彼が書いた次のような言葉はどうか。

《抵抗文学とは何か。文化を擁護して野蛮と闘争する一切の文学が抵抗文学である。つまり、文学の名に値する文学が抵抗文学なのである。抵抗文学をこう定義するのは広義的でありすぎるかも知れない。しかし、ドイツの野蛮、すなわち、ドイツのファシズムは、反ファシズムの現代作家のみならず、レッシングやハイネをも焚書の対象にした。焚書の対象になるほど野蛮の憎しみを買う文学は、抵抗文学にはかならない。また、ハンス・カロッサは、ファシズム独裁下の生活を、ゲーテの著作に慰められながら耐え忍んでいった。それは、ゲーテの文学がファシズムに対する抵抗の拠りどころになるもの、つまり、抵抗文学だからである。さらに、クラウス・マンはファシズムに対する抵抗運動のさなかでリルケの後期の思想詩を読み、しばしば慰めと助言を見出した。抵抗作家に慰めと助言とを与える作品は、とりもなおさずファシズムに対する抵抗文学ではないか。》<sup>43)</sup>

こういった物言いの単純さは、今日目で見ればかなり分かりやすくなっている。私が上記のような引用を敢えてしたのは、彼が没して20年もたってから揚げ足とりをしようがためでは必ずしもない。むしろ問題は、こうした思考法が衣装を変えるだけで現在に至るまで続いてはいないかということなのだ。が、そのこ

とについてはまたのちほど触れる機会があろう。ともあれこうして姿勢で描かれるマン像が幾分偏頗なものになることは避けられない。それが如実にあらわれているのが戦後間もない時期に出た彼の著書『トーマス・マン』（昭和24年）である。佐藤晃一は当時の、現在に比べればはるかに恵まれない文献事情のものともせず、網羅的で色々な方面に目配りの利いたマン論を書いている。40年近くたった現在から見て若干の細かい誤りをあげつらうのはむしろ悪趣味であろう。だが、例えば「作品」の章における『ヴェニスに死す』の扱われ方を見ると、単なる文献事情には還元できない彼の資質の限界のようなものが読みとれる。同じ短篇の代表作『トーニオ・クレガー』に23頁が割かれているのに対し、『ヴェニスに死す』にはわずか3頁しか当てられていないことからしてもこの傑作への冷遇よりは明らかだが、さらに問題なのはその中身である。そこで彼は『非政治的人間の考察』中のマンの発言に依拠しつつ、この作品でマンは《国民や青年を芸術によって教育するのは危険な禁止すべき企てなのだということを理解させたのだ》と言う。<sup>44)</sup> マンの発言自体が実は作中の主人公の独白を自己引用したものなのだが、それはともかく、上で「依拠した」と私が言ったのは括弧つきでのことである。佐藤は前後の文脈を完全に無視して自説に都合の良いように引用しているのだ。上で彼が引いてきたのは、恐らくこの長大な論争の書の「イロニーとラディカリズム」の章で述べられていることであろうが、マンはそこで教育に芸術を利用するのは危険だから禁止せよ等という、一時期のトルストイのようなことを正面切って主張している訳ではない。言われているのは、芸術というものがそもそもかかえこまざるを得ない自己矛盾についてなのであり、精神のラディカリズムとも唯美的ラディカリズムとも敵対するイロニッシュな芸術家気質が、慎重深く自己の問題性を認識せざるを得ないということについてである。「憂愁とイロニーをもって」この短篇の主人公にこのことを認識させた、とマンは述懐している。<sup>45)</sup> ここが肝心なところで、もしこの認識を大声で触れまわるなら彼はたちまち精神のラディカリストに墮すのであり、またこの憂愁の中には無論幾ばくかの矜持が混じっていることはマンもそのあとに述べている通りである。佐藤晃一はそれ自体イロニーに満ちたマンの発言を道徳主義の鋸で切り取って用いている。

『非政治的人間の考察』は無論、錯綜した論理と含みの多い表現によって十全な理解の困難な書物である。文献が乏しくまた部分訳すらも刊行されていなかった当時その全体像をとらえるのは至難の技であったろう。一応目を通していただいても彼の勉強ぶりを立証することになるとも言える。だが、もし『ヴェニスに死す』という作品を虚心坦懐に読みその芸術的な完成度の高さを率直に認めていたならば、こうした書き方が果して出てきたであろうか。佐藤の上のような見方は何もこの時だけのものではない。翌年に書かれた「トーマス・マンの苦悩と偉大さ」でもこの短篇を「唯美主義に対する厳粛な審判」ととらえ、「シュテファン・ゲオルゲのマキシミン伝説への批判」と見られると述べ、《彼が自分のなかの唯美主義的芸術家を殺したことは、生と自然との祝福を得て未来に結びつくことになるのであるから、悲劇ではなくて、悲劇の克服と言わなくてはならない》と言う。<sup>46)</sup> さらに昭和37年(1962年)になってもこうした見方にはいささかの変化も見られないのである。<sup>47)</sup>

悲劇に対しては、絶えずその克服という後からの整合的な視点でしか解釈できない彼の資質を端的にあらわしているのが、『非政治的人間の考察』の部分訳『文明について』(昭和25年)への彼の評である。

《旧日本は文明の名において断罪された。ところで、この『文明について』は、ごらんのとおり「文明に反して」である。理論的にしろ気分的にしろ、もしこの論調に賛成する人があるなら、その人は「日本精神・日本文化」または「東洋精神・東洋文化」という主題でこういう『考察』を書いてみるとよい。徹底的にやれば、成長のための自己克服になるはずで、自他に新しく生きる道を示すことになるだろう》<sup>48)</sup>

一瞬イロニー的な発言かと思いたくなるが、佐藤は大真面目なのだ。虚無を克服し、ファシズムに対し断固たる闘いを敢行するマンの態度と発言が絶対化普遍化され、入口が同じなら出口も一つの筈だという揺るぎない確信が彼のものの見方を規定している。

そもそも佐藤見一の発言にはイロニーの影は希薄である。例外は左翼教条主義的な「ブルジョア作家トーマス・マン」という評価に反発する時くらいで、マンの持つイロニーという要素への彼の評価自体恐ろしく低いのだ。マンのまとまった評論としては最後のものとなった『シラー試論』への彼の評言を見よう。そこ

で彼は、マンが人類滅亡の危機を訴えている箇所に特に触れて次のように言う。《トーマス・マンの有名なイロニー、それはどこへ消えたのだろうか。消えはしない。しかし彼はもともとイロニー専門の作家ではなかったのである》<sup>49)</sup> こう言って佐藤はマンの過去の発言から、人間や人生を真正面から肯定している部分を次から次へと抜き出してくるのである。

佐藤見一の限界を現在からあげつらうのには、繰り返して言うが慎重でなくてはならない。学者は、文献や時代相によって様々に制約されつつ後世の踏台になることを覚悟の上で仕事を残す。大きな仕事をした人ほど後から批判の矢面に立たされやすい。ここで真っ先に佐藤が取り上げられたことは逆に彼の栄光の証明だと言っても良いのである。しかし——。

昭和42年(1967年)7月、佐藤見一は停年を俟つことなく53歳で没した。大学紛争が東大と東教大の入試中止によってその頂点に達する1年半前のことである。生来の蒲柳の質に、東大教授にして日本独文学会会長としての激務が加わってのことであつたらう。だがそうしたことは別に彼の死を象徴的に考えることもできる。彼の提起し続けたトーマス・マン像、それが有効性を失いつつある時彼は世を去ったのではないか。振り返って彼が東大独文科助教授に迎えられたのは、彼の師で先任者、当時の日本独文学界の大御所木村謹治が没した年であつた。同じく停年を俟たずに木村が死去したのは、一つには大戦中のナチス賛美的言動を戦後批判されたからだと推測される。<sup>50)</sup> 師の跡を襲って要職についた佐藤見一は、言わば、その戦後処理を引き受ける形になったのではなからうか。彼を採用した側にそうした意図があつたかどうか、私は知らない。だが少なくとも結果としてはそう言ったと言わざるを得ない。過去に師や東大独文科という場所、或いは彼自身すら<sup>51)</sup> 被らざるを得なかった汚名、それをそそぐのが自分の使命だという意識が、彼をしてその資質に劣らず民主主義者トーマス・マンという観点にこだわらせる要因とはならなかつたであろうか。そして師と同じく停年前に斃れることになった彼は、果して師とその点で質的に異なった仕事をしたと言えるのだろうか——。

佐藤見一的なトーマス・マン像が戦後の日本を覆いつくしていたなどと書けば、事実の歪曲以外の何物でもなからう。その性質上良識的な社会観から大きく離

れることが困難な全国紙が戦後何度かマンの健全なエッセイを掲載したことは別に於て、マンの小説の素朴な愛好者でも、いや素朴な愛好者ほどに、デカダンスの克服という観点からのみ作品をとらえることから却って遠かったのではあるまいか。無論保守反動とか戦争犯罪人の烙印を押された作家を読むよりは安心して来た(?)かも知れないが、そもそも文学作品には、上で「イロニーとラディカリズム」でのマン自身の言葉にあるように、健全な社会常識とは相容れないものがあり、そうしたものへの感受性を持たない輩は所詮文学とは無縁なのである。

佐藤見一的な、余りに健全なマン像への対極をなすのが、やはりマンの作品の翻訳者として名高い高橋義孝のマン観であった。彼は昭和30年に出版した『現代ドイツ文学』において、戦後余り時間が経過していなかった時期のアメリカでのマンに触れて次のように言う。

『自由の問題』、『ヨーロッパに告ぐ』、『デモクラシイの勝利について』等、その他わずかに入手しうるマンの、最近の言説(われわれはむしろ作品を求める)を通読すると、わたくしは壮大な世界市民精神 Weltbürgertum という言葉を想起し、且、マンの考え方にこれを仮定せざるをえぬ。ところがわれわれは(…)精神の巨人族ゲーテ、世界市民ゲーテを想起するのと同じような意味で、トーマス・マンについても世界市民という言葉想起してよいであろうか。実はここには複雑でかなり微妙な問題がいくつか隠れているのである。(段落)第一にトーマス・マン自身に関する問題がある。もし「アメリカのトーマス・マン」が、さきにも挙げたような二三の論説を最近十五六年の業績としているならば、彼は自身謙遜し軽蔑した「文明の文士」になり下がったのでなければならぬ。あのような説教、演説、思想、信念を持つことが世界市民の資格であるとは考えられぬ。たとえばゲーテの場合、彼が世界市民であったことは、実は彼が同時に『マイスター』や『ファウスト』の作者であつたことと内的に(いや外的・世間的にも)相関的なのである。『トニオ・クレゲル』、『ブッデンブロークス』、『ヴェニス(マ)の死』、『非政治的人間の考察』、『魔の山』、『ヤコブ物語』、この系列の最後にたとえば、『デモクラシイの勝利について』——あの反ヴァグネル的・

反ニーチェ的で、三流文士や思想家にふさわしい鼓舞激励の演説と思想・『デモクラシイの勝利について』を附加してよいものであろうか。逆にわれわれはこうも考えることができる。マンは今日あえて三流文士の役割を進んで一身にひきうけるほどに、あのドイツの故郷を愛惜している「ドイツのマン」なのだ。マンが今世紀の最も偉大なるドイツの作家であることは、彼が詩人であることをやめて三流思想家に低落せざるをえなくなつたほどに彼のドイツ離別は深刻な人間の事件だつたということのうちに立証される。わたくしは、マンはドイツを去りがたかつたのだと考えざるをえない。(段落)第二に(…) (段落)第三の問題はわれわれ自身に関係する。『自由の問題』や『デモクラシイの勝利について』が、もし今日(啓蒙的意味においてではなく)ほんとうに日本の知識階級の讃仰の対象となつているのであるとしたら——わたくしは日本の知識階級の未開化性に慄然とせざるをえぬ。こういう論文にするされている思想や事柄が、驚異的であり新発見であるような「知識階級」というものは抑々今日の世界にありうるであろうか。わたくしはこれを信じえない、又、信ずることを欲しない。ああいう論文しか書けぬトーマス・マンとは、退屈きままる一老文士にすぎぬ。(…) (段落) 実にトーマス・マン論は、日本の知識階級と日本文学にとつて不可避免的な、世界へ通ずる途に設けられた関門であろう。ただわたくしは、文筆家の良心にとがめられずにマンを論じうる日本の一日も早からんことを望むばかりである》<sup>21</sup>

恐らく単行本が出た昭和30年よりはかなり早い時期に発表されたのであろうこの文章は、それだけに却って高橋義孝の見方を率直に出して面白。池田浩士によれば、戦時中の高橋はナチス文学の中でも特にその精髓と言うべき詩人をことさらに訳出したというが<sup>22</sup> (そのことをここで非難したいのではない)、恐らく彼には生来佐藤見一とは逆に非合理的なものへの嗜好が強くあつて、それがこうしたマン観を支えていたのであろう。或いは凡庸な出身地域決定論なることを恐れずに言えば、佐藤の書くものが地方出身の優等生の匂いのようなものから逃れられないのに対し、高橋のそれにはどこか擦れた都会人の趣がある。

今の目で見れば、こうした二種類のマン像のうち理

がどちらかと言えば高橋の側にあることは否めないだろう。マンが戦時中にした小説の仕事への視点が、情報不足からであろう、すっぱり抜け落ちていたのだが、却ってそのせいでマン受容の一側面を鋭くえぐる考察が可能になっている。だが戦後の日本におけるトーマス・マンのイメージを形作ったのはむしろ佐藤的な考え方であった。高橋のような非合理的側面に重きをおいた言わば文学的マン像は、マンの作品を愛好する読者や少数の研究者に共有はされていても、そしてデカダンスの克服者にして民主主義の擁護者という言葉が政治的なマン像と拮抗はしていても、絶えずその裏側の、非主流の役割を担わされていたように思われる。作家のイメージというものは、専門家や特別な愛好者を離れて一般大衆によって決せられる場合が少なくないが、戦後まもなく新聞等によって政治的に喧伝されたマンのイメージは容易に変化するものではなかった。マンの名前の普及ぶりに比べて彼を扱ったモノグラフィーが翻訳ものを含めて日本には不思議に少ないのもその一因かも知れない。世界文学全集の解説の調和的結論を読んで教科書風の知識を仕入れ、それであることを済ませてしまう人間が多数である以上、佐藤見一的なマン像が幅を利かせるのは必然の成行きであったのだろうか。上記高橋の論における最後の部分は、そうした状況への苛立ちと読めるのである。

佐藤見一が早い死を迎えた年の翌昭和43年（1968年）、筑摩書房から『非政治的人間の考察』全訳の刊行が開始された。ここにトーマス・マン受容における重要な転回点が認められる。この政治的エッセイは、不思議なことにそれまでマンの主要作品（小説、論文）中唯一邦訳されていなかった。昭和25年に部分訳が出ていただけだったのである。ここにも戦後日本のマン受容において佐藤見一的な考え方が主流であったことの証左があると思われるが、問題はそればかりではない。この晦渋なエッセイの翻訳者が二人の関西在住ゲルマニストだったことである。言うまでもなく日本では翻訳や出版ということでは圧倒的に東京有利である。関西はそれに次ぐとはいえ、一位と二位の差はかなりあると見なくてはならない。事実、それまでのトーマス・マン作品の翻訳を見るとほとんどが東京在住、或いは高橋義孝のように東京と強いつながりを持った研究者によってなされている。それがなぜここに関及して関西の学者によって訳されたのか。別の言い方

をするなら、なぜそれまで東京の学者によって訳されなかったのだろうか。ここにはマン受容、或いはもっと一般的に日本における外国の文物の受け入れ方の持つ問題性がひそんでいるように思われる。もっとも東京の学者も手をこまねいていた訳ではない。昭和47年末になって新潮社版トーマス・マン全集の第11巻として『非政治的人間の考察』が刊行されたからである。しかしこの巻は全集の最終回配本として、それも他の巻から著しく遅れて出されたというだけではない。4人の学者による分担訳であり（筑摩書房のそれは共訳であり分担訳ではない）、訳文のこなれ具合においても見劣りがし、またこうした論争的著作を読む際時代を異にする異邦の読者には欠かせない註や解説が皆無であり（これは新潮社版全集の基本方針だからやむを得ないという見方もできるけれども）、一般には後から出た翻訳の方が優れたものになる筈だがという読み手の期待を完全に裏切るものであった。

関西の二人のゲルマニストは続いて昭和50年（1975年）にE・ヘラーの『トーマス・マン——反語的ドイツ人』を訳出し、充実した評論の乏しかったこの方面の空隙を一挙に埋めた。例えばそこで、第一次大戦期のマンとこのちのヴァイマル共和国支持者・反ナチズムの闘士としてのマンとの比較がなされている箇所を見るなら、同じ訳者による二つの翻訳書がどのようなマン像を提起しているか、そしてそれが戦後の日本で佐藤見一と高橋義孝という二人の学者に代表されたような対蹠的な見方のいずれに近いかが分かる筈である。

《『非政治的人間の考察』は》彼が時代と場所の愚かしさに支払った通行税であった。しかもこの通行税が余りにも高くついたので、トーマス・マンはそれ以後生涯を通じて、自分は政治的債務を負っているという苦い思いに悩まされることとなった。彼はこれを弁済するために、のちになんと頻繁に恐ろしく薄ぺらかな紙幣を濫発したことであろうか！（…）後年における彼の政治的進歩主義への叱咤激励には、ほとんどいつも何か耳ざわりな要素が混じっている。例えば、わざとらしい素朴さ、どこか気のりのしないような人類愛。（…）これは、「時代のたががはずれている」ことを知りながら、王の暗殺を防ぐために同盟を結成しようとするハムレットの訴えのように、そらぞらしく響く。かつての非政治的考察者は、若いトニーオ・クレーガーの芸術家としての倫理的う

しろめたさと根本においては同じものである政治的良心のやましさを 使徒に繰り返し何度も 屈服し、多くの善意と必ずしも十分とは言えぬ才能とをもって、荒廃した都市の住民たちに廃墟のさなかで市民としての義務の遂行を呼びかけるリュベック市参事会員の役を務めたのであった。》

《トーマス・マンの政治的共感のこの錯綜した物語は、政治と人間的な志操との間に善隣関係が支配することを望む善意の人々にとっては、つまづきの石であるにちがいない。というのは、嘆かわしいことに、この「非政治的人間」、この「蒙昧主義者」にして「反動家」の方が後年の民主主義と進歩の代弁者よりも、或いはもっと後年の平和共存の提唱者（あのひきつったような笑顔には、まことに残念ながら、この演技もまんざら悪くないと言いたげな表情がつねに覗いている）よりも比較にならぬくらいすぐれた政治思想家であったというのが真相だからである。トーマス・マンは、進歩の舞台では常に二流どころの役柄しか演じられず、それもしばしばミス・キャストであった。これは決して意外なことではない。というのは、作家の場合、政治哲学といえども創作家としての彼の資質と切り離せるものではないからである。（…）偉大な文学作品は、大抵の場合進歩と仲が悪いものである》<sup>54)</sup>

『非政治的人間の考察』の全訳が刊行され始めてから5年後の昭和48年（1973年）、マン受容にとってやはり転回点を意味する書物が、またしても関西在住の学者によって出された。岩波新書の『知識人と政治』ある。ゲルマニストではなく政治思想史研究者によって書かれたこの本は、第一次大戦期のマンの言動をヴァイマル期の政治思想の動向との関係でとらえようとしたものであり、日本ではマンというとファシズムと闘う時期のもののみがもてはやされ『非政治的人間の考察』には光が当てられていないと序章で言われている<sup>55)</sup> ことから分かるように、上で述べた二人の関西在住ゲルマニストの仕事と同じ精神に基づくものであった。

東京の学者も手をこまねいていた訳ではない、と私は上で述べたことを今一度繰り返そう。『非政治的人間の考察』を単に後に至るための通過地点と見て済ませるのではなく、それ自体の論理に従って正当に評価しようとする試みも、これ以前から東京の何人かの優

れたゲルマニストによって行われてはいた。<sup>56)</sup> だがそれらは大学の紀要や同人誌等に発表されたということも手伝って、大きな影響力を持つには至らなかった。このあたりは学問とマスコミの関係をどうあるべきと考えるかという問題が入ってくるので、軽率な判断は避けなくてはならない。だが、一般に流布した佐藤晃一的なマン像を覆すのに東京の学者が余り大きな貢献をしなかったということは、マンの小説が主として東京方の学者の手で訳されたことと対照をなす事実として確認しておく必要がある。

東京という場所にこだわるのが生産的であるかどうか、私にも疑問がない訳ではない。だがもう一つ例を挙げておこう。上で私は、昭和43年の『非政治的人間の考察』全訳の刊行開始が日本のマン受容にとって転回点であったと述べた。それは別段この訳書の解説などに書かれているマン像が絶対的に正しいという意味ではない。これを批判しやはり後期の民主主義者としてのマンを高く評価することも、或いはそのいずれとも違った新しいマン像を示すことももとより可能だからである。だがそうした見方をとるにせよ、一旦上記の訳書が出た以上、それを踏まえる形で自説を展開しなければ説得力に欠けることになる筈である。少なくともゲルマニストを名のる人間であれば、この点は押さえておくべきことであろう。

昭和47年（1972年）、マンのエッセイ類のアンソロジーが邦訳された。原書は1965年に出ており、トーマス・マンの三男で音楽家からゲルマニストに転じたという変わった経歴を持つミヒャエル・マンが編集したものである。<sup>57)</sup> ここには色々な時代の、様々な対象についてのマンのエッセイが収められているが、就中目を引くのはマンが第一次大戦勃発直後に書いた『戦時随想』(Gedanken im Krieg) が収録されていることであろう。この言わば悪名高いエッセイは、執筆直後単行本に収められただけで、それ以降マンの生前の二種類の全集のいずれにも収録されていなかった。1968年のポケットブック版全集でようやく日の目を見ることになるのだが、それに先立つこと3年前に、さして頁数も多くない文庫版のエッセイ集に編集者が敢えて取り上げたのには、それ相応の意図があった筈で、単に公正を期すためではなかったと考えられる。その序文でミヒャエル・マンがトーマス・マンと政治について述べているところを見よう。

《一人の「非政治的人間」として自分の神々を自



分の回りに集め、自分自身のバルナツス山を築き上げた時の方が、同胞市民に「お前たち！」と（のちにヨーゼフが兄弟たちに呼びかけたように）呼びかけ、『ドイツ共和国について』語った——それはこの演説者が告白しているように、「精神的なものを、それほど厳密に」考えなかった「教育的な」行為であったが——時ほどにも孤独ではなかったのではないか？ 彼は、ある種のいやらしい文明の文士たちの流儀にならって「胸に手を当てて」立ち、自身も僅かな人々と同様虚弱で生き延びないと予見していたものを擁護した。彼は、自分の予言した迫りつつある嵐に直面して希望を失いつつも善意をもって、自己に対するイロニーも豊かに語ったのであった。——共和主義者のいない共和国に仕えることは、本当に孤独な仕事だったろう。この仕事がトーマス・マンにとって意味した自己疎外というおまげが仮になかったとしてもである。(段落)(…)国内で起こっていることに対して、ドイツ国境の外側から彼によって続けられた警告、彼が保護と尊敬を受けていた西側の民主主義諸国との接触、亡命者たちの苛酷な運命を和らげるために彼が行った数々の寄与、戦時中ドイツに投げつけられた言葉（『ドイツ聴取者諸君』）——こういったものを見たからといって、次の事実を見損なうことはあり得まい。世界史は彼がいなくともその道を歩いて行っただし、世界史に影響を及ぼそうという試みは失敗し、進んで「政治的」になろうという彼の覚悟はすげなく断わられてしまったのである。(…)（段落）逆説をたててこう言ってもいいだろう。トーマス・マンは、非政治的人間であることをやめようと考えた時、政治的であることをやめたのだと。西欧の「文明」に抗してドイツ帝国の「文化」を擁護したあの日々ほどに彼の政治的な言葉が積極的な勢いを持ったことは二度となかったし、彼の政治的情熱があればほどの度合に達することも二度と起こらなかった。》<sup>59</sup>

このように編集者は、冷徹な認識のもとに父親譲りの留保の多い言い方で、編集の基本的な考え方を述べている。これに対して訳者は「あとがき」でどんなことを言っているだろうか。

《[アンソロジーの編集においては] マンに好都合の抜萃がなされているのではないかという疑惑

も猜疑心の強い読者はおそらくもたない。しかしトーマス・マン攻撃にとって好材料の『戦時に思う』[Gedanken im Krieg]をはじめ、マンが完全に反動保守的な姿勢をみせていたころの発言も多くあつめられているところからすれば、そうした読者の疑惑も消えることであろう。(段落)(…)

『非政治的人間の考察』を書きおえた1918年までは、マンはカイザーのドイツ帝国主義のもとで反動保守主義者であった。このカイザーのドイツ帝国主義は、その後マンが攻撃を加えたヒトラーのドイツ・ファシズム（全体主義）と大同小異なのである。なぜにマンはカイザー・ドイツを擁護したのに、ヒトラー・ドイツを攻撃したか？ たしかにマンはドイツ文化とドイツ精神とを擁護し、西欧文明とデモクラシーに反対の立場をとっていた。事のはずみでドイツ文化と精神とを傷つけたかもしれないが、西欧諸国のドイツ攻撃は、精神的ドイツに向けられていたのではなく、カイザーのドイツ帝国主義に向けられていた。ところが、マンは、自国の帝国主義は柵にあげ、反動保守の、通俗の愛国者よろしく、（『非政治的人間の考察』以前の）『フリードリヒ大王と大同盟』と『戦時に思う』とで西欧諸国を口汚く罵った。(…)(段落)(…)しかしマンは、『非政治的人間の考察』を執筆し続けているうちに、はたして現実の政治を理解し始めたのであろうか？ 『非政治的人間の考察』の末尾で、マンは「人間の問題は政治的には解決されない、精神的に、倫理的にしか解決されない」と言っている。なんとドイツ的な考え方であろう！ だが、なるほど人間の問題は、政治的には解決されないだろう。しかし、それだからといって、政治のもとにある人間がいつまでも非政治的であるわけにもいきまい。芸術、文化と政治とを、関連のない二つの世界と考えるドイツ的な思考が危険なのであって、この危険を当時のマンは知らなかったのか？ 精神面で人間の問題に責任を感じずる以上、ほんとうは非政治的人間で発言するわけにはいかないのである。すべての精神的態度には政治的なものが当然のこと含まれているのだから、おのずと政治的態度が決定されていなければならなかったのだ》<sup>59</sup>

別段編集者の意見に訳者が従わなければならないというものでもないが、この二人の見解を比較してみる

時、後者の平板さは隠しようがない。そしてそれが『非政治的人間の考察』全訳の刊行後であるだけに事態は一層問題的なのである。訳者はこの全訳に目を通していなかったのだろうか。いや、そんな筈はない。「あとがき」の末尾で新潮社版トーマス・マン全集などと並べてこの3巻本の訳書のことに触れ、「いずれも興味ある非常に優れた刊行であるから、読者に一読をいや、再読を奨めておく」と言っているからだ。だがそうであれば、例えば、そこで言及されているロマン・ロランの日記（邦訳もある）を通じて、フランス知識人の第一次大戦中の言論の実態を知らない訳にはいかなかった筈である。それでいてどうして《西欧諸国のドイツ攻撃は、精神的ドイツに向けられていたのではなく、カイザーのドイツ帝国主義に向けられていた》などと簡単に書けるのであろうか（そもそも、この時期にはフランスであれイギリスであれ帝国主義国家であることに変わりはない筈である）。亡命後のマンの政治的発言を表面的になぞるだけで解説めいたことが書けた時代は終わっていることが、訳者には分からなかったのだろうか。

この訳者が東京在往のゲルマニストだと書けば、単なる偶然だと言われるか、お前は余程東京を目の仇にしているらしいとからかわれるのがおちだろう。私も個々のゲルマニストについて東京だから駄目だ、関西だからいいなどと言いたいのではない。ただこの頃のマン関係の出版状況を見るなら、東京側が生彩を欠くのは明らかであり、それがこういった訳者に象徴的にあらわれてはいないかということなのだ。上記の現象のゲルマニストと場所との関係は、偶然と言っても済まずには余りに示唆的ではなからうか。ことは日本全体の文化輸入のあり方にまで通じている筈である。

マン生誕100年の1975年に日本独文学会発行の「ドイツ文学」誌に二度にわたって「日本におけるトーマス・マンの研究書誌」を書いたのも、やはり関西在往の（上記『非政治的人間の考察』の訳者とは別の）二人のゲルマニストであった。その末尾で彼らは、戦前日本のマン文献に見られる東西の学風の違いに言及して次のように言っている。

《東京の研究者たちのマン研究をなんらかの形で規制し方向づけていたものは、当時ドイツから移入された文芸学の理念と方法であろう。マン文学における浪漫的・形而上学的局面を重視していると思われる、かれらの研究成果のなかには、学問

的・理念的統一性と体系性をめざす努力の跡が窺われるのである。これに対して京都の研究者たちは、学問的形式にあまりこだわらず、ヒューマンイズムの作家マンに対する文学的な共感でもって、対象との主体的な対話を交そうと試みている》<sup>60</sup>

関西の学者の発言であるから、いささか手前味噌的なところがあり、割り引いて受け取っておいた方がよいとは思ふ。関西の人間が何かにつけ東京との比較において自分を語る傾向があることや、二つの地域のいずれにも属さない人間にとっては東京より関西人の文化意識のほうがはるかに鼻もちならないものを感じられるということは言うておく必要があるが、場所の違いによるこうした研究態度の相違は、莫迦莫迦しいと言って簡単に片付けられるものではあるまい。<sup>61</sup>そしてこのことから改めて日本における文化発信の地東京の性格と、日本のマン受容の問題点との関係を考えてみない訳にはいかない。それは、佐藤晃一亡き後の東京のこの分野での不振について考えることにつながり、そしてそれは更に佐藤晃一について今一度考えてみることに帰着せざるを得ない。

先に述べたように、佐藤の仕事のモチーフは、戦時中の言動により汚名を着た先達の仕事を挽回しようとするところにあったように思う。そして本当にそうだったのかという疑問も私は提示しておいた。

ナチス文学を紹介し喧伝した仕事の挽回は、民主主義や世界平和を大声で訴える文学者を称揚することによってなされるのだろうか。私にはそうは思われない。むしろなすべきことは、外国文学者というものの存在についても一度問うてみることではないだろうか。外国文学者は本質的に輸入業者の性格を免れない。外国の文物をいち早くキャッチし、それを幾分国内の人間の口と時代の動向とに合うように加工して提供すること、いささか自虐的に書けばそれが外国文学者の仕事でありまた悲哀なのである。ナチス文学を国策にのっかって輸入し賞讃した先人の仕事を佐藤が本当に取り返したいと思ったのなら、まずそういうドイツ文学者のあり方自体を考え直してみなければならなかった筈であろう。しかし彼のしたことは、行動様式はそのままにして単にアンテナの向きを正反対にしたというだけのことであった。

『知識人と政治』で脇圭平が加藤周一の言葉を引きながら述べているように<sup>62</sup>、トーマス・マンについて

考えてみようとするなら、彼のアメリカでの公式的な発言だけを手がかりにするのではなく、第三帝国時代ドイツ国内にとどまった大衆の感性をも視野に収めておくべきであった。それは何も第二次大戦後のドイツ大衆や言論人の、亡命文学者へのルサンチマンに満ちた声を盲目的に信ぜよということではない。マンが何より読者とのつながりを大切に作家であった以上、本国の読者と彼の書くものとの間に懸隔が生じたというのなら、その実態を明らかにしてかからなければ本当にマン文学を究めたことにはならない筈だからである。双方の意見に耳を傾けて最終的に自分の判断を下すというのが学者としての当然の手順であったろう。だが佐藤見一の書いたマン論にはそうした配慮が払われた形跡はない。無論それは彼に限ったことではないと付け加えなくてはならないが、戦後の日本における代表的なマン研究者がそうであると言う時、そこには戦後日本のマン受容がたどらなければならなかった運命が象徴的にあらわれているように見える。

ドイツ文学者はドイツの文物の輸入業者、という自明の前提が崩れたのが第二次大戦の後であった。ナチス・ドイツが犯罪の根源として断罪された以上、それに染まったドイツの文物を輸入することはタブーとなる。だがドイツ文学とはドイツ国内の文学ばかりではなくドイツ語で書かれた文学をも指すのだという以前からの定義が窮状を救った。ナチス色に染まらず亡命して「国内亡命」という便利な言葉もできたけれどもドイツ語で書いていた作家を紹介することで輸入業者の仕事は成立するからである。私は上でマン受容における東京と関西という視点にこだわったが、それは言うまでもなく東京が日本における外国文化輸入の窓口だからである。戦中はナチス文学を輸入し戦後は民主主義者トーマス・マンを輸入した業者は、やがてドイツの復興と共に再びドイツ本国を輸入の相手国に選ぶであろう。

しかし、再びドイツ本国からの輸入を開始した時、ドイツ文学者の振舞い方は以前と異なるものになっていただろうか。佐藤見一の振舞い方は戦中のナチス賛美の先達と本質的に変わらないと私は上で述べた。時代の流行に安易に迎合すること、自分の研究対象の発言がなされている環境を十分吟味することなく正当化してしまうことにおいて、両者は何一つ変わってはいなかったのである。ドイツ復興後の日本人ゲルマニストがなすべきことは第一に、同じ轍を踏まないように

用心することであろう。マンに関して言えばこういうことである。マンのアメリカでの発言を鵜呑みにせず戦時中ドイツにとどまった大衆の声にも耳を傾けよと上で書いたが、逆もまた真なりということだ。戦後のドイツ本国でのマンに関する意見には、亡命した言論人への屈折した思いがつきまとっている。それも異国で極貧のうちにたれ死にした詩人とかいうのならまだ感情移入できる余地もあるが、マンの場合物質的にはさほど問題のない生活を続けることができたのだから、ルサンチマンの対象にはおあつらえ向きである。そうした背景を顧慮せずに、本国人の意見だからといって素直に拜聴してしまっはまづいのである。もっともこれはマンだけに限った話ではなく、例えば先頃日本独文学会でヘッセに関するシンポジウムが行われた時、司会の西義之は次のように述べたが、外国文学者はいつでも心すべきことであろう。《戦後のある時期、ドイツ本国でのヘッセ評価は極度に低くなったが】私たちのヘッセ評価には——ひいてはドイツ作家評価の多くに——この種の「外圧」はなんの役割も演じていないか?》<sup>91)</sup>

戦後日本のマン受容は、ある時期までは本国での屈折した感情や思潮をかなりの程度無視する形で進んできた。それが不可能になった時、日本のマン受容はどう変化したのだろうか、あるいはしなかったのだろうか。ある時期から東京のマン受容が彩りを欠くものになったという事実は、一人の作家・思想家の全容（と思われたもの）をほぼ紹介し終えた後の空白ということもあろうが、或いはマンに対するドイツ本国の微妙な雰囲気、その背景を十分吟味することなく直輸入した結果でもあったかも知れないのである。

一つの試金石は、1975年のマン生誕100年をきっかけとする西ドイツにおける反トーマス・マンの動きであった。これをどう受け止めるかが、日本のゲルマニストの体質をはかる格好の材料となっただろう。だが表面上日本の研究者はさほどその余波を受けなかったように見える。それが良いことなのか（細かい時流に拘泥せずじっくり仕事をしている、本国の動きを鵜呑みにしない）、悪いことなのか（勉強していないので本国の動きに無頓着である、盲目的に対象を信じて研究に励んでいる）、軽々しい判断は慎まなくてはならない。ただ、僅かながら本国の振動は伝わってはきた。そしてその伝わり方は、上で述べた佐藤見一の問題点が今なお克服されずにいることの証左と見えなく

もなかったのである。

西ドイツを反マンの感情が席捲した年の翌1976年（昭和51年）、日本独文学会発行の「ドイツ文学」誌に一つの書評が載った。取り上げられたのは大阪大教授・片山良展の『トーマス・マン『魔の山』の研究』、評者は学習院大教授（当時）・朝日英夫である。そこでは初めのあたりで次のように言われている。

《たとえマンが週刊誌「シュピーゲル」誌上でこてんこてんにやっつけられようと、日本のゲルマニストのマンに対する崇敬の念はいささかも傷つけられることなく、「トーマス・マン学」はチューリヒの「トーマス・マン・アルヒーフ」を本拠とする研究者たちとならんで、日本において永遠の生命をもちつづけるであろうと、筆者はかたく信じるものである》<sup>64</sup>

かなり陰にこもった言い方なのでこれだけ読んでもはっきりとは分からないかも知れないが、これは皮肉なのであり、そこには「お前たちはまだマンなんぞを有難がっているが、ドイツ本国ではマンはさんざん叩かれてるんだ、分かったか」という含みがある。この後で片山の上記著作、及び『魔の山』自体への疑問が（やはり陰にこもった言い方で）述べられていることからそれは明らかである。無論朝日英夫が片山の著作やマンの小説を低く評価するのは、彼なりの文学観からのことだろう。だがそうであるなら、何故「シュピーゲル」誌のマン攻撃をわざわざ枕にもってくる必要があるのか。それは、彼の文学観が本国の動向と相関的なものとしてしかあり得ないということの証左なのではあるまいか。こうした朝日の本質は、これに先立つ1969年の彼の著作を併せ見る時一層明瞭にあらわれてくる。「ドイツ文学」誌で日本のマン研究家を皮肉の7年前に彼が『文学的ニーチェ像』の中でマンについて言っていたことを見よう。

《トーマス・マンがなくなったのは、1955年8月12日であった。彼はその年の6月6日に80回目の誕生日をむかえ、全世界から、お祝いの言葉を受けたばかりだった。ドイツ一流の文芸雑誌『ノイエ・ルンド（マ）<sup>(マ)</sup>ドジャウ』も、分厚い記念特集号を出したが、その巻頭にはアインシュタインの祝辞がのせられていた。彼トーマス・マンが、さまざまな機会に示した毅然たる態度こそ、その高い芸術的業績にもまして、重量があると思われる、という意味の祝辞であった。マンの生涯をふりかえつ

て、われわれもまたこの言葉に同感を禁じえないのである》<sup>65</sup>

7年の間に評価の方向ががらりと変わったのが悪いというのではない。ハンス・カストルプのような青年にとってばかりでなく、日本という魔の山では6歳のご老体にとっても7年は錬金術の変化を起こさせるのに十分な歳月であろう。しかしそのたびにドイツ本国の雑誌からの引用を枕にしなければ安心できないというのでは、マンはともかくニーチェからは失笑されるのではなからうか。

ただの一例では論証にもなるまいが、日本独文学界を代表する雑誌で、東京在住の学者がドイツ本国の雑誌を引用しつつ関西在住の学者に冷笑を浴びせるというのは、上で私が繰り返して述べてきた日本における文化輸入の図式に、見事なまでに一致しているのではあるまいか。朝日英夫の片山批判が的はずれに終始しているというのではない。率直に言って、私も片山の著作は余り高く買えないと思う。むしろここで考えなくてはならないのは、朝日が日本の外国文学者のある典型を、戦後30年以上を経た時点でなお体現してしまうという不変性（普遍性？）なのである。

しかし真に問題なのは、東京でも東京のゲルマニストでもありはしない。日本及び日本人の精神構造が、東京という場所や朝日英夫のような外国文学者に象徴的にあらわれているに過ぎないからだ。「地方」の立場から「中央」を断罪してみても始まらないことである。関西がトーマス・マン受容の転回点の発祥地だったということにしても、転回は東京色によるマン紹介が一通り終わったところでようやく可能になったのである。言いかえれば、マン受容においては関西ですら東京の影として出発せざるを得なかったということだ。影の意識は無論時として重要な役割を果たす。しかし同時にそれは影ならざるものを温存する役割をも果たしてしまうのだ。外部から押し寄せる波の頂点と谷間に、それぞれの住処に応じて棲み分けるという構造が温存されている限り、ナチス文学を称揚したり、一方的に民主主義者トーマス・マンを持ち上げたり、ドイツの雑誌を引用しつつ自分の発言を権威づけたりする弊害は永遠になくなることはないだろう。「トーマス・マン」を誰か他の文学者や思想家に入れ換えることで、茶番劇は続いてゆくだろう。そしてそれは住む場所ではなく、我々の精神構造の問題なのである。

問題にされるべきは、我々自身である。

### 註

#### 人名の表記について

欧米人については原則として、日本でもある程度知られている場合は片かな表記、馴染みのない場合はアルファベット表記としたが、何人もの名が並ぶ場合などはその箇所での統一性を重視してこの原則によらないこともあり、全体としては一貫性に欠けるものとなったことをお断りしておく。なお敬称は一切省略させていただいた。

- 1) Marcel Reich-Ranicki (hrsg.): Was halten Sie von Thomas Mann? Achtzehn Autoren antworten. Frankfurt/M. (S. Fischer) 1986.
- 2) Eckhard Heftrich: Der gehaßte Kollege. Deutsche Schriftsteller über Thomas Mann. In: Internationales Thomas-Mann-Kolloquium 1986 in Lübeck (Thomas-Mann-Studien Bd. 7). Bern (Francke) 1987. S. 351.
- 3) Bernhard Blume: Perspektiven des Widerstands: Zur Kritik an Thomas Mann.  
In: Thomas Mann (Wege der Forschung Bd. CCCXXXV. hrsg. von Helmut Koopmann. Darmstadt. 1975) S. 105ff. (Zum erstenmal aufgetreten in "Germanic Review" 1956.)
- 4) Hans Wysling: Schwierigkeiten mit Thomas Mann. In: Wysling: Thomas Mann heute. Bern/München (Francke) 1976. Aufgenommen auch in: Thomas Mann 1875-1975. Vorträge in München-Zürich-Lübeck. hrsg. von B. Bludau, E. Heftrich u. H. Koopmann. Frankfurt/M. (S. Fischer) 1977.  
なお、拙訳があるので興味のある方はご覧いただきたい。(「RUNEN」18号 1984)
- 5) Thomas Mann oder der Selbsterwählte. Zehn polemische Thesen über einen Klassiker. In: Der Spiegel. (Nr. 22) 26. Mai 1975.
- 6) H. L. Arnold(hg.): Thomas Mann (text + kritik. Sonderband) München 1976. (erste Auflage) S. 161.
- 7) 註6)を見よ。
- 8) いささか奇妙な訳文になったのは、原文のせいである。„Welches Interesse hat für Sie heute, 20 Jahre nach seinem Tod, das Werk Thomas Manns?“ 意味は分かるとはいうものの、syntaktischに見てこういう構文が可能なのか、疑問なしとしない。E. Heftrichはこの「文法上の杜撰さ grammatikalische Laxheit」からして戦略的だと皮肉っている。なお、この三つの設問への細かい疑問点についても Heftrich は語っている。E. Heftrich, a. O. S. 364f.
- 9) H. L. Arnold, a. a. O. S. 167f.
- 10) ebda. S. 181.
- 11) ebda. S. 191. なお、Rühmはその前衛的な作風のためか、表記においては(普通名詞であれ固有名詞であれ文頭であれ)一切大文字を使っていない。しかしここでは普通の表記に改めた。
- 12) ebda. S. 167.
- 13) ebda. S. 196.
- 14) Wysling: Thomas Mann heute. S. 95.
- 15) Marcel Reich-Ranicki: Eine Jahrhundertzählung: »Tonio Kröger« In: Thomas Mann und die Seinen. Stuttgart (DVA) 1987. S. 93ff.
- 16) Martin Walser: Ironie als höchstes Lebensmittel oder: Lebensmittel der Höchsten.
- 17) H. L. Arnold, a. a. O. S. 24f.
- 18) Hanjo Kesting: Krankheit zum Tode. Musik und Ideologie.
- 19) H. L. Arnold, a. a. O. S. 35ff.
- 20) ebda. S. 43.
- 21) Yaak Karsunke: »…von der albernen Sucht, besonders zu sein« Thomas Mann »Der Tod in Venedig« — wiedergelesen.
- 22) ここだけ読むとドイツ語の rhetorisch にはこういう意味しかないかと錯覚しそうだが、無論そんなことはない。ドゥーデン大辞典を見ると rhetorisch は意味上三つに分けられており、最初が「[古典的な意味での] 修辞学の」、二番目が「弁論に関する」で、三番目に Karsunke の引用している訳がくる。
- 23) H. L. Arnold, a. a. O. S. 63.
- 24) ebda. S. 69.
- 25) Rolf Hochhuth: Thomas Mann oder der Undank vom Urenkel. In: Der Spiegel (Nr. 24) 8. Juni 1975

- 26) Pankow は東ベルリンの行政区域。
- 27) アレクサンダー・フォン・フンボルトの提唱で1842年に作られたもので、すぐれた学者や芸術家を会員とする。
- 28) 後述のようにこの反論はのちに Hochhuth. のエッセイ集に収められたが、そこでは語句等に少なからぬ異同がある。ここでは初出の「シュペーゲル」誌のものによった。
- 29) Hermann Kurzke: Thomas Mann Forschung 1969-1976. Ein kritischer Bericht. Frankfurt / M. (S. Fischer) 1977. S. 10.
- 30) ebda. S. 15.
- 31) ebda. S. 17f.
- 32) Kurzke: Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung. München (C. H. Beck) 1985. S. 13f.
- 33) Marcel Reich-Ranicki: Eine Jahrhundertzählung: »Tonio Kröger« S. 108.
- 34) Erich Heller: Thomas Mann. Der ironische Deutsche. Frankfurt / M. (Suhrkamp) 1959. S. 140.
- 35) Heftrich: Der gehaßte Kollege. 作家やマスコミ人に劣らず学者にもマン嫌いが多いことについて Heftrich はこう書いている。《他ならぬトーマス・マンの場合に限って拒否能力を高度に発達させているのは、小説家や文芸欄執筆者といった人たちだけではない。文芸学者もまたそうなのだ。(段落) イロニーをめぐる議論がその一例である。50年代のムージルの発見以来、ムージルの〈本物の真正な〉イロニーをマンの〈そう思われていただけの贋の〉イロニーと比べて賞賛するのが、反トーマス・マン論者のスタンダード・レパートリーになっている。そうした際よく使われるのは、哲学的な文芸学の得意とするうるさいまでに細々とした区別である》 Heftrich, a. a. O. S. 356.
- 36) Herbert E. Lehnert: Der Taugenichts, der Geist und die Macht: Thomas Mann in der Krise des Bildungsbürgertums. In: Thomas Mann 1875-1975. S. 75f.
- 37) FAZ. 4. Jan. 1988.
- 38) Fachdienst Germanistik 2/1988
- 39) Rolf Hochhuth: Täter und Denker. Stuttgart (DVA) 1987. S. 312.
- 40) これ以外では、朝日新聞1951年1月4日、同1954年1月9日、産業経済新聞1954年1月1日等。
- 41) 近藤久寿治(編)『らてるね記念綜輯号 1.』東京(同学社)1984年 176頁。
- 42) Hermann Kurzke: Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung. S. 311.
- 43) 佐藤晃一・山下肇『ドイツ抵抗文学』東京(東大出版会)昭和29年 1頁。
- 44) 佐藤晃一『トーマス・マン』東京(世界評論社)昭和24年 182頁。
- 45) Thomas Mann: Gesammelte Werke in 13 Bdn. Frankfurt / M. (S. Fischer) 1974. Bd. XII. S. 573.
- 46) 佐藤晃一『トーマス・マンの世界』東京(大修館書店)132頁。
- 47) 同上書 224頁。
- 48) 同上書 108頁。
- 49) 同上書 120頁。
- 50) 『手塚富雄著作集』第3巻 東京(中央公論社)昭和56年 月報参照。
- 51) 池田浩士によれば、戦時中旧制東京高校教授だった佐藤はヒトラーの『わが闘争』訳書の推薦人に名を連ねたという。池田浩士『ファンズムと文学』東京(白水社)昭和53年 304頁以下。
- 52) 高橋義孝『現代ドイツ文学』東京(要書房)昭和30年 96頁以下。
- 53) 池田浩士、前掲書。 305頁以下。
- 54) Erich Heller: Thomas Mann. Der ironische Deutsche. S. 128f. und 140.  
エーリヒ・ヘラー『トーマス・マン 反語的ドイツ人』前田・山口訳 東京(筑摩書房)1975年 161頁以下及び176頁以下。  
ここでは前田・山口訳によるが、一部漢字と読点の打ち方を変えさせていただいた。
- 55) 脇圭平『知識人と政治』東京(岩波新書)1973年 11頁。
- 56) 例えば森川俊夫、青木順三。
- 57) Michael Mann (hg.): Das Thomas Mann-Buch. Frankfurt / M. (S. Fischer) 1965.  
ミヒャエル・マン(編)『市民・芸術・神話——トーマス・マンの世界』塚越敏訳 京都(人文書院)1972年
- 58) M. Mann. a. a. O. S. 12ff.  
なお、塚越訳では12頁以下に相当するが、該当部分

には誤訳が散見されるので、ここでは拙訳による。

59) 塚越, 前掲書, 253頁以下。

60) 日本独文学会(編)「ドイツ文学」55号(1975年秋) 157頁。

61) かつてその著書『ファシズムと文学』で日本人ゲルマニストの戦時中と戦後の発言との落差を追及したのは、やはり関西に住む池田浩士であった。また最近大阪外大在任中に没した八木浩も、その遺稿集『詩と演劇』において、戦時中のゲオルゲ紹介における木村謹治, 山崎光宣, 秋山六郎兵衛といったゲルマニストたちのナチス迎合的な言辭に言及してい

る。

62) 脇, 前掲書, 6頁以下。加藤の発言は昭和32年になされている。

63) 「ドイツ文学」61号(1987年秋) 180頁。

64) 「ドイツ文学」56号(1976年春) 122頁。

65) 秋山(朝日) 英夫『文学的ニーチェ像』 東京(勁草書房) 1969年 224頁。

本稿執筆にあたっては、資料及びその収集面で、新潟大学の同僚今井道児氏, 福沢栄司氏, 木村豊氏, 桑原聡氏のご協力をいただいた。